

# 「鉄輪ものがたり」

別府市

今日新聞

この「鉄輪ものがたり」は大分県別府市に本社がある地方紙「今日新聞」に掲載している「懐かしの別府ものがたり」に2010年5月14日～2010年10月19日まで連載された「鉄輪ものがたり」を集約編集したものです。

今日新聞では今日現在（2012年3月1日）でもこの別府物語を連載しており、同時にインターネットでも公開されています。これは故郷をはなれ故郷を思う私たち別府人にとっても大変ありがたい企画であり、このほか、別府のことがつぶさに知ることができ毎日楽しみに拝読しています。

私は鉄輪で生まれ、幼稚園、小学校、中学校、高校とこの温泉の地で育ちました。昭和18年～昭和37年まで住んでいました。「鉄輪ものがたり」に出てくる人々のお名前は、地元の名士や、近所の人、幼な友達やそのご家族の人など知っている人が多く50年たった今でも懐かしく思い出することができます

昭和30年当時既に私の家でも今日新聞をとっていたし、近所でも購読者数が増えていた。また、友達が今日新聞の新聞配達をされていてその時間になると遊びを途中でやめていたのが昨日のようです。

「鉄輪ものがたり」著作権は今日新聞に帰属することはいうまでもありません。貴重なこの「ものがたり」（資料・写真）を手元に保存し、故郷の友人にも紹介しようと自身のwebpageに登録しました。ご容認、ご高配くだるようお願いします。 2012.03.01 T.yada



## No960 鉄輪物語

いでゆ坂に昭和4年開業 今のヤングセンター向かいにあった扇屋昭和 11 年頃の旅館数 27 軒



鉄輪の湯治場街を貫きいでゆ坂。ゆるやかに曲がった通りの風情が、道行く観光客の心を和ませている。その中ほどにある現在のヤングセンター向かい側に、かつて扇屋旅館があった。

◇ ◇ ◇

年度ごとの資料(「鉄輪温泉使用料徴収人員表」)に、前年まではなかった「瀧澤シゲ」(扇屋の経営者)の名前が登場するのが昭和4年度で、この年に開業したと思われる。信州の出身で、向こうでも同じ名前の旅館をしていたらしい。

ちなみに資料に掲載されている旅館(17軒)のうち、扇屋(宿泊者)はこの年の合計が1022人だった。大型旅館では8581人、8265人といった数字も見受けられる。ちなみに同6年度は575人となぜか非常に減り、7年度はまた増えて1455人となっている。

◇ ◇ ◇

掲載した旅館の写真では、画面左側がいでゆ坂。通り沿いは塀で、塀の間から石段を上ると旅館があった。看板には「旅館扇屋内湯完備 電話四九番」とある。現在のみどり屋旅館の玄関やその山手の中野屋駐車場あたりが、扇屋だったようだが、大きく変わっていて昔の面影はない。(続く)

◇ ◇ ◇

※昭和 11 年頃に鉄輪旅館組合が発行した観光案内、旅館案内のリーフレットには扇屋も含めて 27 軒の旅館名が掲載されている。

「泉屋、錦屋、常盤屋(電長三〇番)、筑後屋本館(電四七番)、筑後屋新館(電五八番)、御座屋(電四五番)、大平屋(電長三番)、扇屋(電四九番)、温泉閣(電一四七四番)、丸屋、屋(電三四番)、この 27 軒ですべ



番)、温研アパート、上富士屋(電二三番)、萬屋(電長四六番)、瀧本屋、大黒屋、辰己屋(電九番)、鶴屋(電萬力屋(電七二番)、丸見屋(電六八番)、富士屋(電長二番)、富士屋支店(電八番)、朝日屋(電五一番)、港新屋(電七番)、平野屋(電二七番)、瓢箪旅館部(電二九番)、備後屋」。「等の旅館あり」と付け加えているので、てだったわけではないということだろう。

## No961 鉄輪物語 おやつはおこしだった



扇屋旅館の子孫によると、戦後のことだが、子供



扇屋旅館の子孫思い出毎晩劇場に行き芝居見物

はかまってもらえないので、毎晩劇場(鉄輪の大勝館のこと)に芝居を見に行き、帰ったら寝ていた。ただで入れたのは株主か何かだったのだろう。当時はおこしがおやつで、おこしが缶に入っていた。



扇屋には地獄(地獄釜)もあった。地下が子供部屋になっていて、温泉が通っていたので冬は暖かかった。旅館と、山手側に貸間があり、渡り廊下で繋がっていた。貸間には米や野菜を持参で来る人がいた。

母は信州生まれの竹子、父は安心院出身で中津などで働いていた清臣で、几帳面な人だった。鉄輪の人によると、瀧澤清臣は旅館組合の会計をしていた。また保険の仕事もしていたという。

◇ ◇ ◇

扇屋は戦後しばらくして旅館をやめたようだが、住宅地図を見ると、昭和 29 年版には「旅館扇屋」があるが、同じ場所が 34 年版では「山喜荘」に変わっている。その間の 31 年版ではなぜか「旅館山喜荘」と「扇屋」の両方が並んで記されている。

付近の旅館や商店を、住宅地図の記載通りに海側から山手に向かって書いてみると、昭和 29 年は「貸間ミドリヤ→旅館扇屋→土谷鍼灸→パチンコオカベ」、31 年は「貸間みどり屋→旅館山喜荘→扇屋→岩波菓子店→安波店」、同 34 年は「みどりや→山喜荘→大分銀行鉄輪出張所」となっている。

---

○次回は同じく鉄輪の温泉山永福寺を取り上げます。2010 年 5 月 15 日(土)|

## No962 鉄輪物語

### 亀川駅から客馬車で永福寺先代住職の「鉄輪小記」より交通事情の移り変わり



いでゆ坂沿いにある温泉山永福寺。先代の河野智善住職は大正元年(1912)福岡県遠賀郡の生まれで、子供の時におじの智円住職に呼ばれ鉄輪に来た。昭和 56 年(1981)に亡くなったが、脊椎のガンの手術で下半身の感覚がなく、10 年間寝ていた。その間に病床で昔の思い出などを書き留めたのが「鉄輪小記」で、貴重な歴史の記録となっている。この「鉄輪小記」から、今回は客馬車を紹介する。(句読点を増やすなど、読みやすいように改めています)

◇ ◇ ◇

客馬車の歴史は古いが、我々の子供の頃は入湯客が福岡県や別府以北の大分県方面より鉄輪に来られる人は、亀川駅よりの人が多い。鉄道が宇佐までしか無かった時は(注・亀川駅は明治 44 年開業)、柳ヶ浦よりだった由。

亀川駅より町を出はざると、ごろごろ石の登坂でがたがたゆられて着く。その頃は貸間のお客さんが多く、農家の人は米、味噌、中には醤油や野菜まで持ってくる人も居た。

バスが運行し出すと、客馬車は急激に衰へ、最後に二台のこっていた。それも人を乗せるのではなく荷物運搬として使用。一人は亀川の藤やん(藤やんと呼ばれて居たが、名前ではなくよく知った人の話しでは藤内と云ふので上の一字を取り、藤やんと呼んで居たそう)。もう一人は川田と云って居たが、病気で亡くなられた。





乗合自動車は泉都バスと林田バスと二社あった。車が小さいので(現在のマイクロバス位だったと思う)鉄輪の狭い道でも何処でも通れるので、お客さんの帰られる時、バス会社に電話して頼んで置くと定期バスは旅館まで迎へに来てくれた。随分良くサービスをしてくれたものだ。



戦争が段々苛烈になり、ガソリンの配給がなくなり、木炭バスとなる。別府の町より鉄輪に帰る時、観海寺入口辺りまで来ると、ぐーとスピードが落ち、人の多い時は動かなくなり、下りて貰って居た。時には下りて車の後押しをやり、鶴見地獄前までやっと着いた事もある。時には現在の明星学園の辺りで下りる事もあった。(続く)

## No963 鉄輪物語

### 七夕の箱庭やホテル 永福寺先代住職の「鉄輪小記」より情緒あつた戦前の風物



温泉山永福寺の先代河野智善住職が病床で認めた「鉄輪小記」から、鉄輪の昔をしのぶ文章を紹介している。今回は子供の頃に経験した七夕の風習“箱庭”の思い出や、戦後すっかり変貌してしまったが、ホテル飛び交いカエルがやかましいほどに鳴いていたのどかな昔の田園情緒について書いた2編を掲載する。



#### 七月七日の箱庭



鉄輪は現在は一月おくれの盆である。勿論七月七日(一番始めは旧盆で其の後変って一月おくれとなる)其の日は墓ざらへ(墓掃除日)でそれぞれの墓組があり皆んな一緒に朝早くから寄って掃除をする。組によっては其の後墓供養の読経をしお参りをする。

子供達は其の日は笹竹を取って来て七夕祭りやら箱庭を造ったりする。自分の家の泉水や庭を利用しそれぞれ一生懸命に工夫をこらし素焼の塔や家、人、其の他の物を買って来て造る。

夜になるとローソクをともし明りを入れる。子供達は浴衣がけで何処の家ののが良く出来て居るかとワイワイ騒ぎながら見て廻つたものだ。之を鉄輪言葉では「たんぼ」とか「いけ」とも云って居た。七夕様の楽しい一つの行事であつたが現在は失なはれてしまい、情緒が無くなり残念な事だ。尚墓掃除も現在は自分の家の都合の良い日にして、一緒にやる事も少なくなった。

露をとり願たくして短冊に



周囲変貌 昭和五十一年九月四日記

昭和二十年終戦後あまり年月を経ない間に周囲はすっかり変ってしまった。裏の小川とまでいかないが、下水用の流れを距てた向うの田も失くなった。

それまでは田植の季節は勇ましく田をかく馬を使う声がしたり、夜には蛙の合唱あり、夏はほたるが飛交う。小川には鰻や小魚も居た。川ぶちを時々颯が走り抜ける。鼠の多いのには閉口した。家の中庭には小さな泉水であったが、水すまし、あめんぼう、源五郎、ヤゴ、何でも居た。夜蛙の合唱には眠れぬ位だった。それが今では皆んな居なくなった。

裏の川は温泉の汚水で色が鼠色になったり、赤黒くなったり、嫌な何とも云へぬ臭気がただよい、水ではなく湯の川になってしまった。ボーリングの乱掘で温泉利用の便は良くなったが、自然の風物詩はすっかり失なわれた。

◇ ◇ ◇

※掲載写真には「朝日郷出征軍人戦死者慰霊祭 鉄輪女子青年団生花供養 昭和13年10月16日」と説明書きがある。

## No964 鉄輪物語

幼い芸人や飛行機見物 永福寺先代住職の「鉄輪小記」より大正時代の素朴な思い出



河野智善住職は大正元年生まれなので、子供の頃の思い出というと大正時代のことになる。温泉の前で芸をして湯治客からいくばくかのおひねりをねだる子供がいたり、わざわざ亀川の海岸まで学校の引率で飛行機を見に行く話など、現代からはかけ離れたテーマだがどこか引きつけられるものがある。ともに、「昭和五十一年九月一日記す」と同じ日に書きとめている。

◇ ◇ ◇

子供の芸

小学校に行かぬ様な小さな子供を連れた芸人(親方とでも云うのだろう)が共同温泉の前の広場で三味線をひいて踊らせる。三回許りやった後、見物の湯治客にお金を貰う。小さな子供が一生懸命にお客さんに「はりこんで頂戴、お願いします、はりこんで頂戴」と頼む。そうすると心あるお客さんが、いくばくかの金をちり紙等に包み投げしてくれる。温泉の廻りにある宿屋の二階からも投銭をくれる。俗に云う花と云うか、ひねり銭だ。

少ない時は親方の目くばせを見て、もう少し張込んで頂戴、と大きな声で頼んで廻る姿は哀れである。子供の頃は面白く見たものだが、今頃思出すと情けなく哀れで、日々の暮らしもさぞ可哀想なものだった事だろう。勿論現在では児童福祉法違反で、あり得ない事であるが、おひねりを貰った後、又二三次踊って他の共同温泉場の方へ廻って行った。

◇ ◇ ◇

飛行機見物

大正十三年の初夏の頃だったと思う。暑い日だった。亀川の海岸で水上飛行機が飛ぶと云うので小学校から先生が引率して見物に行く。行って見ると一台海上に水上機が浮かんで居たが、中々飛行せず、あいてしまった。皆んなでワイワイ遊びながら、二、三時間位待った様な気がする。そしてようやく

飛ぶと云うので見て居ると、我々の見て居る上空を二三次飛廻って終りだった。今から考へると真にあっけないものだったが当時としては珍しい事だった。昭和 年(注・1文字分空白になっている)頃だったと思うが確信がない。別府海岸天然砂湯の突堤の辺りから遊覧飛行機が飛んで居た。之も別府の上空を二三次旋回して終り、料金はいくら位だったか知らないがあまり長く続かず止んでしまった。(続く)

## No965 鉄輪物語

戦後は消えた子供の行事永福寺先代住職の「鉄輪小記」より藁で地面叩く亥の子やご縁ぶれ



浄土真宗の開祖親鸞聖人の忌日に行う「報恩講」を子供たちが呼びかけて回る“御縁ぶれ”や、収穫を祝う民俗行事“亥の子”も戦前あったが、戦後はなくなってしまったと感慨を込めて書いている。



御縁ぶれ

戦前(昭和二十年終戦前の事)あった行事で無くなったものは、御縁ぶれ(これは浄土真宗の報恩講の家庭行事)。真宗の門徒は秋の取入れ後、親鸞聖人の正当忌日の頃、大抵の家は報恩講を勤めて居た。愈々読経が始まる頃になると、子供連中が御縁ぶれに鉄輪の町を廻った。

「御縁に参いちよくれ、お掛りなさったぞへ。お茶おけはお豆ぞへ。何々屋ぞへ。」と何回も声をそろへ大声でどなって廻った。屋号のある処は屋号、又は名字、お茶おけ(なまってお茶うけ)は其の家の出す品物を呼んで廻った。読経後、法話、終ってお茶が出て色々話しがはずんだ。親類や親しい人達にはお参りに行った人にお齋が出た。



亥のこ

地方では今日も伝って居るが鉄輪にもあった。勿論、旧朝日村中何処でもやって居た。わらの束を縄でくくり、友達同志と一緒に家々を廻り文句をそろへ、縄たばで商売や家内繁昌をはやし言葉で云いながら打つ。そしてお金、紙、子供用の物等をお礼に貰い皆んなで分けた。之も楽しい行事であった。取入れ行事の終った感謝祭の一つであった。

現在の恵まれた品物の豊富な時代と違って、一般では子供の時代にはその当時には中々買ってもらへなかった。貧富の差も随分違って居たので面白くもあり、楽しみでもあった。(続く)

※広辞苑では「亥の子」について、「西日本で旧暦一〇月亥の日に行われている収穫祭。田の神が去っていく日と信じられ、子どもらが石に縄をつけ、或いは縄を固く固めた束で土を打って回る。」と解説している。

## No966 鉄輪物語

## どこでも泳げた子供時代 永福寺先代住職の「鉄輪小記」より姿消す別府の海水浴場



温泉山永福寺の先代、河野智善住職が病床で書きとめた「鉄輪小記」という冊子から、思い出話を紹介している。今回は昭和 51 年 12 月に記したもので、別府の海水浴場が姿を消すのを嘆いている。



### 別府の海岸

別府市内に海水浴場が失くなった。来年には唯一つ餘って居る亀川の関の江の海水浴場も失くるとの事、海岸が汚染されてきた為だ。私達が子供の頃、大正年間で朝日村の頃は海岸線一帯何処でも泳げた。

距離的關係で六勝園や亀川の海岸に泳ぎに行く事が多かった。歩いて行き歩いて帰る為だ。六勝園の方は石が多く、気を付けぬと貝殻で足を切った。砂浜で良いのが餅ヶ浜の海水浴場で賑やかだった。当時の別府市内では北浜の天然砂湯があった処で、海水浴をしながら砂を掘ると下の方が温かだった。

又現在の別府タワーの有る所辺りで泳いで居る人も多かった。旧大阪商船会社の有った処から浜脇方面には距離的に歩いて行く關係上遠いので行った事もなく、場所も記憶にない。あの近所の者は泳いで居たと思うが、魚釣りの人達が居った様だ。

今度亀川に天然砂湯温泉が復活されたそうで永続してくれると良いが、地理的な關係もあり心配だ。(続く)

## No967 鉄輪物語

### 我欲のない人だった温泉山永福寺妻恒子さん語る先代住職



温泉山永福寺の先代住職が病床で綴った「鉄輪小記」から、子供の頃の鉄輪の情緒ある思い出などを紹介してきたが、「我欲が全くない人でした」と人柄を語るのは妻河野恒子さん(89)。

「忘れてきたお布施を届けてもらったが、お礼も言わなかった」というほど金銭に淡々としていた。

毎朝本堂でお参りをして、次にむし湯でお参りするのが日課だった。趣味は“下手な”日曜大工で棚などを作ったが、寸法が合わなかったりした。晩酌をして、ひいきの巨人のナイター中継を見るのが楽しみだった。



恒子さんは尾道の真言宗の寺、光明寺の生まれ。昭和 18 年にはるばる嫁いできたが、夫は2、3カ月もすると出征した。満州で終戦を迎えシベリア抑留の憂き目にあった夫が帰ってきたのは、昭和 22 年のことだったという。

大正 10 年2月生まれで、現在数えの 90 歳だが、はつらつと話す様子は年齢を感じさせない。絵をかくことと読書が趣味。元気の秘訣は「言いたいことをしゃべっている」せいだろうかと話している。(続く)

## No968 鉄輪物語

大正 13 年秋に梵鐘設置 温泉山永福寺亀川駅から寺まで信者の行列



今回は温泉山永福寺の所蔵写真から、鐘にまつわる話を紹介したい。

同寺に鐘が設置されたのは大正 13 年(1924)秋のことで、掲載した写真には「大正 13 年秋梵鐘鑄造亀川駅より行列にて運ぶ鉄輪東区(旧下)大師温泉付近」と説明書きがある。鑄造した鐘が亀川駅に到着し、駅からは信者たちが行列を作って運んだ。写真をよく見ると、鐘を乗せた荷車は牛が引いているようで、荷車の上には当時の住職智円が立ち上がってカメラの方を向いている。信者たちは、その荷車につけた長い綱を手にして写真に収まっているようだ。

いでゆ坂から少し下った所にある大師湯(2階が鉄輪東公民館)あたりは、写真同様に道路が大きくカーブしている。そのあたりの風景なのだろうが、住宅が建て込んでいる現在からは想像もできない。



掲載したもう1枚には、「大正 13 年秋梵鐘落慶供養餅搗」とあり、鐘を取り付けたお祝いの餅つきを行っている風景。餅をつく男たちはみながっしりと筋肉がついた立派な体つきで、現在とは随分違う。お縁には景気づけの三味線弾きの人たちも見える。(続く) 2010 年 5 月 26 日(水)|

## No969 鉄輪物語

お国のため供出の憂き目に 温泉山永福寺失われた鐘 昭和 54 年復活



大正 13 年(1924)秋に設置された温泉山永福寺の梵鐘だが、わずか 18 年後の昭和 17 年(1942)12 月に金属回収(金属供出)のためお国のためにと差し出すことになった。

掲載写真に写っているのは河野智善住職と左は長泉寺の住職。背後に張られた紙に「梵鐘供出供養 昭和十七年十二月 温泉山主智善」と書かれている。鐘だけではなく、金属製の仏具なども一緒に供出したという。

その後、長らくなかった鐘が復活したのは昭和 54 年 12 月 27 日のこと。市内小倉の梶原晋さんという人が個人で寄付してくれた。取り付け作業がこの日に行われ、翌 28 日は午前 11 時から法要(梵鐘鑄造撞初式慶讃法要)が盛大に営まれた。(続く) 2010 年 5 月 27 日(木)|

## No970 鉄輪物語



## 幻の一遍上人銅像

温泉山永福寺昭和7年に完成はしたが…



昭和7年7月5日の新聞記事に「鉄輪に一遍上人の銅像／建立に奔走する永福寺住職」の見出しで、一遍上人銅像のことが書かれている。

当時の河野智円住職が一遍上人の銅像建立のために奔走していたが、大阪市の彫刻家中島保美氏が10カ月かけて制作した高さ10尺(3メートル余り)の銅像が完成したという内容。ところが、不況のせいで資金が集まらず困っている(「之が基金について智円師が各方面に交渉してゐるが不況の為に仲々思ふに任せず行き悩みの状態となつて居り、有識者に惜しがられて居る」というわけだ。

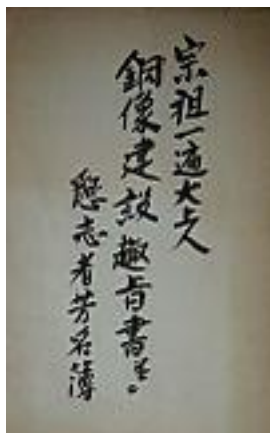
掲載した永福寺所蔵の写真では、見上げるように大きな一遍上人像をはさみ、智円住職と中島氏が写っている。ついに完成したかと感慨深かったはずだが、実際には銅像建立は幻に終わってしまった。

どういう結末となったのかは不明。銅像はできたものの、資金不足で受け取ることができず、別の寺が引き取ったのだろうか。あるいは写真を見る限り、鑄造する前の原型が完成しただけのようにも思われ、実際に銅像はできなかったのかもしれない。(続く)



※製作者のプロフィールについて永福寺の資料では次のように紹介されている(カタカナを平仮名に改め、句読点を補った)。

「中島保美先生は大正十四年、日本政府の命に依りフランス、スイスニケ国に遊学せられ、サロンに入賞さる事数回で当時巴里に開催された万国美術工芸博覧会に選ばれ審査員を命ぜらる。同氏の作品は英国ヴィクトリヤ帝室博物館に収められて世界の技術と認められている。近くは大正天皇御大礼に大阪市より献上純銀鑄工の帆船を故市長池上四郎氏と共に同伴宮中に参内し献上された。亦今上陛下御大礼に大阪市より彫金大花瓶、同府より彫金大衝立、何れも先生の作品。並びに皇太后陛下の茶具等を畏多くも宮中に納められ実に名誉ある斯界の大家で帝展一方の重鎮である。現知事柴田善次郎氏より銀杯一組を下付され、現在は大阪東成区勝山通り八丁目に居を構えらる。以上。」



## No971 鉄輪物語

油屋熊八らと計画か 温泉山永福寺一遍上人銅像「成就せず」

温泉山永福寺には一遍上人銅像建設の趣旨建設趣旨書並ニ懇志者芳名簿(「宗祖一遍上人銅像建設趣旨書並ニ懇志者芳名簿」)が残され和3年とあり、この年に計画が始まったようだ。会が当時の別府公園(現在のアーリーナ周辺)府市公会堂(現在の中央公民館)や浜脇高等



旨書・芳名  
ている。  
昭和3年と  
で盛大に開  
温泉の建設、野口の大仏建立など多くの出来事があった



簿(「宗祖一遍上人銅  
趣旨説明の文末に昭  
いうと、中外産業博覧  
かれたのをはじめ、別

記念すべき年。

発起者は河野智円住職と3人の檀家総代(加藤稱司、加藤久太郎、原正六)、賛成人には朝日村長直江忍、鉄輪郵便局長佐原秀太郎、朝日村在郷軍人分会長加藤●(糸へんに丸)、別府市長平山茂八郎、石垣村長矢田保、亀川町長篠崎豊彦をはじめ錚々たる名士の名前が連なっている。

さらに「顧問」になっているのが、「別府市亀の井ホテル 亀の井自動車社長」の油屋熊八。寄付者欄にも「一金二百円也 別府市亀の井ホテル社長油屋熊八」と先頭を切って多額の寄付を表明していることから、銅像建設計画への意欲は並々ならぬものだったのだろう。

昭和3年は油屋が、少女車掌が七五調の案内をする地獄めぐりバスを走らせた年。鉄輪にもう一つ観光名所がほしいと、アイデアを出したのではないだろうか。

芳名簿の最後に、銅像建立が成就しなかったとあり(「懇志者ノ方々ニ対シテハ申訳ナキ次第ナレドモ銅像建立成就セズ。乍然名簿ハ寺院ニ保存シ永久感謝ノ意ヲ表スルモノナリ…」)、一遍上人の銅像建立計画は幻に終わった。(続く)

## No972 鉄輪物語

“仏に出会った” 温泉山永福寺蒸し湯で起きた奇跡



温泉山永福寺の写真アルバムの中に、鉄輪の蒸し湯で起きた奇跡のような出来事にまつわる古い写真がある。

掲載した2枚の写真はともに福岡県の人。林諫左エ門という人は蒸し湯に入っている時に、何か光る物があるので、手に取ってみると小石で、よくよく見ると仏様の姿に見えるので一生大事にして拝んだという。

掲載写真で卓上に小さな石らしき物を収めたミニサイズの仏壇が2つ置かれているが、これが仏様の姿に見える小石だったのだろうか。(年代は記されていないが、写真全体の雰囲気から明治の終わりか大正初期ごろと想像される)

なお昭和23年にその孫が同寺を参詣したという。

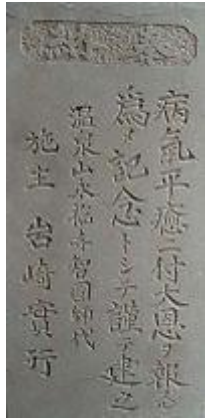
もう1枚は角屋作太郎という人で、蒸し湯に入浴中に如来様を拝んだということで報恩読経にお参りに来た。昭和

14年4月25日のことだった。(続く)



## No973 鉄輪・明礬物語

神経痛治ったお礼に 温泉山永福寺福岡の岩崎氏 如来像寄進



温泉山永福寺を訪れた人の目を引くのが、本堂前に聳える阿弥陀如来像。

台座には昭和10年3月、先々代の河野智円住職の時代に、福岡市博多大学通り1丁目に住む岩崎實行(じっこう)という人が病氣平癒のお礼に寄進したことが刻まれている。

孫の岩崎国武さん(79)＝福岡市＝によると、湯治で神経痛が治ったお礼と先祖供養のためだった。鉄輪のほかにも明礬、さらに福岡県的那珂川町にも寄進しているという。



「祖父は大正半ばから昭和11年まで、コルセットの製造販売をしていました」とのことで、腰を痛めた人の背筋をしっかりと保つための矯正用具を扱う商売をしていた。義手・義足を神戸から取り次いで販売することもしていた。

掲載写真では、画面右側中央が岩崎氏で、そのひざに寄りかかって立っているのが5歳頃の国武さん。自分では記憶はないが、刀でひもを切って除幕したそう。ここ数年は来ていないが、毎年永福寺と明礬の子安観音にお参りを続けていた。(続く)



※掲載写真で岩崎氏の左隣り(杖をついている僧侶)が当時の住職河野智円。岩崎氏の右後ろが先代住職の河野智善。画面左側2列目は岩崎氏の妻義佐(ぎさ)と国武さんの両親。

※台座に刻まれている文面は次の通り。「奉納 病氣平癒ニ付大恩ヲ報ズル為メ記念トシテ謹テ建之 温泉山永福寺智円師代 施主 岩崎實行」、「温泉山永福寺中興開基智円代 昭和十年三月建設 阿弥陀如来 福岡市博多大学通一丁目 施主 岩崎實行 妻義佐 博多石匠 国広石峯」

## No974 鉄輪・明礬物語

明礬にも子安観音を寄進 永福寺・阿弥陀如来像の岩崎氏 柵屋旅館の常連客だった



昭和10年3月、鉄輪の温泉山永福寺に大きな阿弥陀如来像を寄進した福岡市の岩崎實行氏。実は明礬温泉の地蔵泉そばにあった柵屋旅館の常連客で、明礬にも子安観音を寄進していた。

現在、糸びすや旅館の下にある“お弘法様”と呼ばれる一角に安置されている子安観音。寄進された当時の写真が元柵屋旅館にあり、それを見ると、岩崎夫妻や僧侶らのほかに、この“お弘法様”を守っていた安野智円(女性)、その智円と茶飲み友達でもあった柵屋旅館女将の加藤ナヲや孫らが一緒に写っている。



写真の隅に写る5歳くらいの男の子が、ナヲの孫で元自治会長の加藤篤さん(79)。平成8年に当時長寿会会長だった兄信さん(故人)が「長寿会便り」に書いた文章(「お弘法様境内の子安観世音について」と)と写真をコピーした資料を作り、子安観音のことを知って

ほしいとこのほど配布した。(続く)



※明礬薬師寺そばにあり、おびたしい石の仏様が安置されている「明礬八十八カ所」。明礬の歴史に詳しいみどり荘の加藤義則さんによると、次の通り。(すでに2年前に本連載で紹介したが、再掲する)

——大正初期、明礬地区に居住していた安野智円という女性が弘法大師をお祀りすることにより苦しみ悩む人を助けるため、衆生済度を始めた。住民をはじめ多くの信者の寄進により、明礬入口の所に大正 11 年大師堂が落慶した。

その後、智円は弘法大師のお告げにより「温泉四国八十八カ所」の実現を発願。大変な努力で 88 カ所の仏ができあがった。金比羅様、鍋山、滝場、クロオソ一帯に地区民や信者によって寄進者名を刻印し、観音像・弘法大師1対ずつが安置された。

昭和 26 年に亡くなったあとを嗣いだのが、娘の内田ロク。ロクを中心に、あちこちの山に安置された仏をこの滝場の霊場に集める奉仕作業が行われたのが、現在の「明礬八十八カ所」。 2010 年 6 月 2 日 (水) |

## No975 鉄輪・明礬物語

### 明礬へ百数十人の行列 永福寺・阿弥陀如来像の岩崎氏子安観音のほか地蔵も寄進



永福寺に大きな阿弥陀如来像を寄進した福岡市の岩崎實行氏は、明礬の“お弘法様”にも子安観音像を寄進したが、元柵屋旅館にはその行列風景の写真も残されている。

場所は今の明礬うどんがあるカーブのあたり。当時は周囲に一面の稲田が広がっていた。写真左端に写っていて、行列の先頭にいるのが前回紹介した“お弘法様”を守る前野智円。寄進者の岩崎實行・義佐夫妻と僧侶たちも写っている。行列の最後尾には、台座に載せて傘を差し掛けた子安観音像が見える。

写っているだけでも、老若男女約 130 人。道路のカーブあたりの人物は、画面からはずれているので、それを合わせると 150 人くらいが参加していたのではないだろうか。観音像につながる“善の綱”と呼ばれるヒモを、みな手にしている。

前回掲載したように、子安観音の由来を調べた柵屋旅館の加藤信さん(故人)や弟の篤さんは、昭和 10 年 10 月のことではないかと推定している。また行列は鉄輪の永福寺から出発したらしい。



現在は湯量不足で休業中の地蔵泉にも、岩崎氏が寄進した地蔵がある。台座に「妙順童子供養為」と刻まれており、亡くした娘を供養するものだったようだ。(続く) 2010 年 6 月 3 日 (木) |



## No976 鉄輪物語

### 松寿寺復活はかなわず 尾道の寺の名を引き永福寺に



『別府市誌』(2003年度版)には「縁起によると、建治2年(1276)一遍上人が熊野権現の加護をうけて鉄輪地獄を鎮め、時宗の庵を結び、一遍の幼名をとって松寿庵と呼んだ」とあり、一遍上人が永福寺の開基。

ところが明治初年に、松寿寺(松寺庵)は住職が亡くなったあと無住になっていたため廃寺となってしまった。

その後、再興願いを提出するものの、いったん廃寺となったものを復活させることはできないと許されず、苦肉の策で広島県尾道の寺の名前を借りて永福寺となったのが明治24年。

一方、寺の資料によると建物の方は、当時狭く老朽化していたため、明治33年に建て替えの計画を立てたが資金不足で延び延びとなり、同38年にやっと庫裡の新築が完成、本堂は明治41年に起工し、翌42年11月に完成した。

◇ ◇ ◇

掲載した『別府温泉繁昌記』(明治42年5月発行)口絵の本堂の写真は、同年11月の落成以前の姿ということになるが、見た限りではほぼ完成しているようだ。本堂の屋根の上にはまだ工事が行われており、作業中の人物の影も見える。

掲載したもう1枚の写真には、同寺を再興した先々代の河野智円住職(前列左から4人目の背の低い人物)が写る。「再興之碑」は現在も本堂前に立っている。

2010年6月4日(金)|

## No977 鉄輪物語

### 寺の宿坊が始まり 温泉閣智円の妻リュウが経営



いでゆ坂をそぞろ歩く観光客。永福寺そばでは自然に境内に目が向楽しんでいるようだ。

古い旅館資料「大正二年度鉄輪温泉使用料徴収人員各月宿屋別表」には13軒の各月の宿泊者数が記入されているが、その中に先々代住職智円の妻河野リュウ(資料には経営者名だけで旅館名はいずれも記されていないため、温泉閣という文字も記されていない)の名前が出てくる。

ちなみに、この年度の13軒の総宿泊者数は7万659人で、温泉閣は3104人。月ごとに見ると、時候の良い4月(638人)5月(607人)に対して、寒い時期の11月(63人)、12月(89人)、1月(62人)の落ち込みが大きく、100年近く昔の湯治客の傾向がわかって興味深い。



き、本堂やその奥にある温泉閣の風情を温泉閣はもともと寺の宿坊が始まり。古



智円・リュウの娘千種に迎えられた婿養子の茂が先代。現在の河野忠之さん(67)は 23 歳の時から後を継いでいる。(続く)

◇ ◇ ◇

掲載写真の1枚は973回の時に載せた昭和 10 年岩崎實行氏の阿弥陀如来像寄進時の写真だが、その中にリュウ、茂が写っている。 2010 年 6 月 5 日(土)

## No978 鉄輪物語

### 鉄輪俳句支えて 18 年 愛酎会会長の温泉閣河野さん集まった湯煙情緒の句3万余

町おこしグループ「鉄輪愛酎会」は、オリジナルブランドの「鉄輪焼酎」販売利益を生かして町作りを行い鉄輪の浮揚を図ろうと昭和 59 年 11 月に発足した。

そのユニークな活動の一つが平成4年8月に始まった「鉄輪俳句・湯けむり散歩」。地獄や旅館など約 40 カ所に投句筒を置いて、湯けむり情緒を詠んでもらおうとの企画。3カ月に一度回収し、倉田紘文さんの選で季節ごとの優秀句を発表しているが、これまでに集まった句は今年4月末現在で3万536句と膨大な数に上る。

温泉閣の河野忠之さんは長くリーダーをつとめた原寛孝さんの後を継いで、一昨年 12 月に会長となった。最近はずべてを入力することはやめたというが、以前は回収した句をすべてパソコンに打ち込むなど、手間のかかる裏方作業を続けてきた。「おかげで倉田先生のような方とお近づきにもなれました」と話している。

かつての鉄輪では、保守・革新とさまざまな党派の議員もいたが、“鉄輪党”ということでもとまっていたという。町作りへの河野さんの変わらぬ熱意は「そういう先輩たちの薫陶を受けたことがあるかもしれません」という。(続く)

◇ ◇ ◇

※焼酎の売り上げは当初に比べると激減しているため、会員から会費を集めるようになったり、第3水曜日の夜に焼酎を飲む会を開いて親睦を深めるようにしたりと運営方法も変わってきているという。

※年間最優秀句を刻んだ句碑も共同温泉前など鉄輪のあちこちに 16 基。野口雨情歌碑、選者倉田さんの句碑も含め同会が建てた碑は 18 基を数え、風情ある町の雰囲気作りに一役買っている。優秀句を掲載したカレンダー「鉄輪ごよみ」も長年発行を続けている。

2010 年 6 月 7 日(月)

## No979 鉄輪物語



いでゆ坂沿いに田んぼ!? かつきや後藤章さん昭和3年に祖父達吾が新築



いでゆ坂沿いで商店と旅館・貸間を兼業している「かつきや」は、当主の後藤章さん(74)＝自治委員朝日校区支部長＝によると、それまで田んぼだった土地に昭和3年、祖父達吾が新築したという。場所はヤングセンター向かい側のちょっと東側だが、湯治場街のまん中がかつては田だったとは驚かされる。

達吾は筑前屋(ちくぜんや)の3男で、妻は新屋旅館の次女安波テルエ。筑前屋というと、県議もした故佐藤晴信さんがいるが、元々は後藤姓だったという。

達吾は新屋から土地をもらって建てた。貸間のほかに化粧品、タバコ、塩などの販売をしていた。



以前は農閑期に広島から一週間、10日間と泊まりに来ていた。客は米や味噌を持参し、炊事道具を借りて自炊していた。「時代が変わって、旅行に来てまで料理をするのが面倒くさいという考えになった。素泊まりで外食するようになった」と後藤さん。

かつきやは玄関前のガレージ部分が泉水だったという以外は、昔とほとんど変わっていないという。(続く) 2010年6月8日(火)|

## No980 鉄輪物語



合併前日の朝日村会議 村議・市議務めたかつきや後藤達吾昭和10年9月4日別府市に

鉄輪を含む朝日村が亀川町、石垣村、別府市と合併したのが昭和10年9月4日。その前日の朝日村議会の様子を写した珍しい写真がかつきやにはある。

後藤章さんの祖父達喜が朝日村の村議会議員をしていて、掲載写真では右から2人目に写っている。

写真の裏面には「昭和十年九月三日別府市ニ合併スベク最後ノ村会撮影」とあり、議員の名前なども書かれている。親戚の安楽屋の後藤熊吉(右から4人目)も写っている。

かつきやにはほかに、昭和4年4月撮影の村会議員たちの記念写真もあり、議員は1期だけではなかったようだ。さらに合併後2回目の昭和15年6月の別府市議会議員にも当選している。



ところで後藤さんは昭和17年に朝日小学校(当時は国民学校)に入学したが、祖父達吾に付き添われて校門をくぐった。ところが、入学式では(市会議

員だったため)祖父は来賓席にいてそばにはいなかった。心細さから家に帰ってしまった。自宅ではお祝いの餅つきの最中で、餅を食べていると、祖父から「学校にいない」と電話がかかってきた。あとでさんざんに叱られたという思い出がある。

すでに太平洋戦争も始まっていて、毎朝の登校は町内ごとに集合して2列で隊列を作った。「うちの町内(井田)が一番子供が多かったのだが」と当時を振り返っている。(続く) 2010年6月9日(水)|

## No981 鉄輪物語

### 朝日村最後の村長は!? 大野保治さん議場の思い出も



昭和10年に別府市と合併した朝日村だが、さかのぼると明治22年4月1日に鉄輪村と鶴見村が合併してできた。

歴代村長は(2003年度版『別府市誌』による)松川儀八(明治22年—25年)、佐藤政一(26年—27年)、直江重次(27年—31年)、加藤累三(31年—35年)、佐藤政一(35年—37年)、加藤累三(37年—45年)、西山吉郎(45年—大正14年)、加藤永次(14年—15年)、直江忍(15年—昭和4年)、加藤称司(4年—10年)と10代にわたる。

◇ ◇ ◇



ところで前回掲載した最後の朝日村議会(合併前日の昭和10年9月3日)の写真で、裏面に記されている出席者の氏名をあらためて紹介すると、議員が右側から順に加藤末彦、後藤達吾、藤原辰治、後藤熊吉、尼子甚之介の5人、左側から順に平馬太郎、西山盛夫、矢田光夫、直江忍の4人で合計9人。岩瀬清吾が欠席、加藤●(糸へんに丸)と安波利夫は辞職と書き添えられている。

ところで、正面にしているのが村長で、加藤称司のはずなのだが、村長吉村政次郎と記されていて、どういう事情だったのかは不明。

ほかに(氏名だけで席順が書かれていないので確定はできないが)画面に向かって村長の左が助役佐藤忠司、向かって右が書記(2人)で隣りが本田信義、その隣りが安波亀治。

◇ ◇ ◇

さて、この頃の村役場は市の朝日出張所の位置にあった。祖父(吉二)が村議会議長をしたこともある大野保治さん(85)＝北中＝は「父(信一)が書記をしていたので弁当を持って行ったことがある。壁に掲げてある写真も見覚えがありますよ」と話している。(続く) 2010年6月10日(木)|

## No982 鉄輪物語

### 海地獄前に海軍休憩所 昭和13年高岸家・大野家が寄付







現在の海地獄前の横断道路を挟んで向かい側あたりに戦前、温泉プールもある「別府海軍下士官兵休憩所」という施設があった。海軍がひいきにした料亭なるみの高岸源太郎が昭和 13 年に寄贈したが、一緒に土地を寄付したのが何と前回朝日村の議場の思い出を語ってくれた大野保治さん(85)＝北中＝。

といっても、実際には母チワ(茅輪、平成8年没・享年 95 歳)がしたことだが、父が早く亡くなったためまだ別府中学2年の大野さんが家督を継いでいた。



献納式は同年 11 月9日に同休憩所内で行われたが、大野さんは学校から許可をもらい母と出席した。姉や親戚の女学校生が給仕をつとめた。別府中学の兼子校長も来ていたという。

なお、献納した土地は戦後、国から「縁故払い下げ」を受けて、噴気を利用する醤油醸造工場をした。「払い下げでは母がなるみの大将と一緒に熊本の財務局に2回ほど行ったと思います。高岸さんがついた泉源を使わせてもらいました。昭和 28、29 年頃までやったと思います」と話している。(続く)

2010 年 6 月 11 日(金)|

## No983 鉄輪物語

### 温泉プールに平屋3棟 別府海軍下士官兵休憩所絵はがき



横断道路の海地獄と反対側あたりにあった「別府海軍下士官兵休憩所」のエピソードを前回書いたが、今回はその絵葉書を紹介したい。温泉プールに露天風呂、平屋の休憩施設3棟があった。

同封の施設概要によると、次の通り。土地が約2030坪(土地高燥にして老松鬱蒼として繁り空気極めて清澄なり)、水源地が約1000坪(休憩所の西北約十丁の山林中にあり水量豊富にして水質極めて良好なり)、家屋三棟(何れも木造平家建にして建物面積合計 73・99坪 林間に点在す)、温泉プール一個(縦十三間半 幅五間 深さ三尺五寸乃至四尺五寸)、泉源(イ、海地獄より引湯 口、坊主地獄より引湯、ハ、敷地内湧出地獄)、露天浴場(溪間に臨み雅趣に富む)とある。





さらに備考として、「土地二千余坪



の内二二七坪は別府市大野保治より献納せるものにして其の他の土地及施設は

別府市高岸源太郎の献納せるものなり」と書かれている。(※注原文はいずれもカタカナだが、平仮名に改めた)(続く) 2010年6月12日(土)|

## No984 鉄輪物語

調理や餅つきにもく/STRONG 昭和12年の『大別府案内』より戦前の地獄釜の風景



戦前のガイドブックでは鉄輪はどんな風に紹介されているのか、ちょっとのぞいてみたい。朝日村などが別府市と合併したあとの昭和12年に発行された「大別府案内」という本の、鉄輪温泉のページをめくってみよう。

◇ ◇ ◇

——鉄輪温泉場は、正に山手地獄地帯の中心にある。それもその筈、この温泉場其物が八丁四面の大地獄で、焼け野ヶ原であったのを、石垣海岸、今の聖人ヶ浜に上陸された一遍上人が此処まで登って来られて、法華経を唱へ乍ら、一字一石の心血を注いで地獄を埋立て先づ蒸湯を開かれ、ついで寺院を建立された由緒ある温泉場であるのだ。それ故、現在の旅館の地下は地獄であり、床の下から湯気が吹き、オンドル式な暖い部屋があり、台所には地獄のカマドがあり、焚火炭火なしに地獄の熱力で湯をわかし、物を茹で、飯をたく等、其他この地熱利用の製菓会社もあると言ったあんばいで、この温泉場は殊に異色のある所である。昔から多くの病患者を全治せしめた歴史に立つ処だけに、今日も別府地方としては、最も湯治入湯気分の旺んな所であり、入湯賄ひの旅館が多く極めて格安に湯治生活が出来るやうになって居る。(続く)

◇ ◇ ◇

※掲載した2枚の写真の解説文はそれぞれ「鉄輪温泉場では地獄の竈でおいもを蒸したりお菜を茹でたり、お茶を沸したり、又お酒のお燗もする。」、「地獄の竈の上でお米を蒸し正月のお餅をついたりお菓子を製造したりする。」とある。



2010年6月14日(月)

No985 鉄輪物語

牛馬家畜も湯治生活 昭和12年の『大別府案内』より一日でも足りぬ瓢箪温泉



前回から戦前のガイドブック「大別府案内」(昭和 12 年)で、鉄輪がどんな風に紹介されているのか、のぞいてみる。

◇ ◇ ◇

——この湯治生活は蒸湯を中心とするが、芯から暖まる筋 湯渋湯 美しい温泉量の多い熱の湯、胃腸に特効の谷の湯、原の湯の下手には牛馬の入浴する温泉もある、さすがに泉量豊富な土地だ、牛馬家畜も湯治生活が出来るとは何んと幸福な処ではある。湯治の成績見る可きものあるに到れば、歩いて瓢箪の娯楽温泉に出かけるのもよからう。溪流に懸る橋を越えて地下にトンネルあり、其中に電灯あり、壁の左右に処々に神仏の像を祭り様々の形に作った洞窟の中に温泉が湧いて入浴場がある、見物するだけの価値でも充分、況んや自らタオルを肩に、あの壺、この室、この瀧あの池と凡てこれ温泉ならざるなきに遊べば一日半日を費して尚ほ足りないであらう、瓢箪形建築の展望台に午餐を運ばせることも出来る、実にここの趣向は、見るに足り、遊ぶに足り、学ぶに足るものがある。(続く)

◇ ◇ ◇



※掲載した2枚の写真の解説文はそれぞれ「鉄輪温泉場の展望」、「瓢箪温泉瓢箪閣六階建高さ七十余尺(注・70尺は21尺余り)」とある。 2010年6月15日(火)|

## No986 鉄輪物語

執筆者はアウトドア趣味!? 昭和 12 年の『大別府案内』より温研や明礬の散策も提案



戦前のガイドブック「大別府案内」(昭和 12 年)の鉄輪の項をひもといっているが、執筆者は大のアウトドア好きだったのか、あるいはこの時代はそういう野外趣味が流行していたのか、鉄輪からの散策コースがいろいろと紹介されていて興味深い。

◇ ◇ ◇

まずは九州大学の温泉治療学研究所について。

——温泉湯治の方法を徹底的に学ばんとすればここ(注・鉄輪のこと)より西南数町の九大温泉治療学研究所に赴いて一応診察指導を受けるなり入院するなりするがよい。(中略)地はこの大別府温泉地帯の東海岸に面するゆるやかなスロープの松林の中央、最も健康地帯の中心に位し、景は大湾と大山とを前後にして只この庭を踏む丈でも凡そ病気などなくなりさうな絶勝の地である。(中略)温研下の

別府荘園から南山荘、実相寺山にかけては諸君に取ってこよなき散策の好適地である。このあたりは別荘地帯として又諸事業の計画地帯として現在のところでは選取り見取りと言った形である故、諸君の半日のハイキングに充分価値あることを伝えたい。——

このほか、お勧めの場所としてあげているのが、吉弘神社や鬼の岩屋、さらに地獄地帯のこと。

——鉄輪温泉場を中心に歩いて五分から十五分位の地点に見る可き処が相当多い、先づ明礬温泉道路に沿ふて、鉄輪地獄は諸君の旅館の中央に

ある。登りて左に白池地獄、右に鬼山地獄、上手に海地獄、鬼石地獄、かくして最も上手に本坊主地獄遊園地がある、この遊園地に道を距てて火山の神様で県社の火男火売神社があり——

さらにここから明礬の紹介も続いている。(続く) 2010年6月16日(水)|

## No987 鉄輪物語

春木川上流の内山溪谷 昭和12年の『大別府案内』より伽藍岳・塚原温泉へハイク



戦前のガイドブック「大別府案内」(昭和12年)で紹介されている、鉄輪からの散策コースの続きを見てみよう。

◇ ◇ ◇

まずは明礬から。

——明礬温泉場には有名な温泉の素、湯の花の採取場が沢山ある。これは是非一見す可きである。山の好きな人なれば、ここより奥約一哩にして内山溪谷のキャンプ場に至り、扇山の頂上を数十分にして極めるのも快哉であり、鍋山を登りて伽藍岳を極むれば天下の絶勝は実にここに尽されたるを見るのである。ここに到れば塚原温泉までは僅か数町、塚原地獄に至って別府礦水の採取場を見るのも一興である。——

——明礬温泉より北東の湯山に登って臥牛の腹を下る様なダラダラ坂を北鉄輪に下るコースは、これ又絶大の讃辞を投げて尚ほ且つ足らぬをおぼゆる大風光の岡続なる事を諸士よ必ず実験せられよ、必ず必ずの四字をここに添へる。諸士は生涯中の一大発見をするであらう——

◇ ◇ ◇

※春木川上流の内山溪谷は昭和5年に選定された「別府八景並びに三勝」で、三勝(志高湖、内山溪谷、仏崎遊園)に選ばれている。

※戦後も夏にはキャンプ村が開かれていた。 2010年6月17日(木)|

## No988 鉄輪物語

蒸気の“あなぐら” 明治21年の解説書より他村もまねをするけれど…



鉄輪の温泉施設では何と言っても、一遍上人が築いたとされるむし湯が有名だった。その古い解説書をひもといてみよう。

国立国会図書館の近代デジタルライブラリーで公開されているのが、明治21年の「鉄輪蒸窖及両温泉分析並医治効用」という案内書。

両温泉とは洪の湯と熱の湯だが、「蒸窖」(じょうこう)という見慣れない文字がある。「窖」は「あなぐら」で、むし湯のことを「蒸気のアナぐら」と言っているわけだ。全文が漢文調で記述されているが、ぼちぼち眺めていこう。

◇ ◇ ◇

「本村温泉及ヒ蒸窖ノ諸病ニ奇効ヲ奏スルハ世人ノ普ク知所ニシテ我豊後国速見郡温泉ノ多キ古ヨリ蒸窖ノ設ケアルモノハ独本村アルノミ他ノ温泉モ

亦往々本村ニ象トリ蒸窖ヲ造築スルモ一モ其ノ性効本村ニ髣髴スル能ハサルヲ以テ今皆廃棄ニ属シタリ」

つまり、鉄輪村の温泉と“蒸窖”は各種病気に特効があると世間に広く知られる。“蒸窖”の設備があるのは鉄輪村だけだ。他の温泉もまねをして作ったが、その効き目は及ばず、いまはほったらかしにされている。(続く) 2010年6月18日(金)

## No989 鉄輪物語

四湯をフルコースで入浴 明治21年の解説書よりむし湯→七瀑→渋の湯→熱の湯



明治21年の「鉄輪蒸窖及両温泉分析並医治効用」(国立国会図書館近代デジタルライブラリーで公開)という古い案内書から、昔のむし湯について紹介しているが、120年近く前は独特な入浴のしきたりがあったようだ。



「窖ノ中央ニ一大石柱ヲ建テ柱ノ周囲ニ枕石十六箇ヲ置キ以テ十六人ヲ臥シムヘシ十六処所在ニ随テ各其名称ヲ異ニス(中略)凡ソ窖口ヨリ入り石柱ヲ繞リテ輪次右旋シ終テ窖ヲ出ルヲ以テ一周トス一人一処ニ臥コト凡ソ「ミニユート」弱トス」

むし湯の石室の中央に大きな石の柱があって、その周囲に16の枕石があり、定員は16人だった。それぞれの位置に名前が付けてあり、1分弱程度で右回りに移っていくというやり方だった。

「一周ノ後窖ヲ出テ直チニ所謂七瀑ニ至リテ其患部ヲ搏撃シ終リテ渋ノ湯ニ浴シ然ル後又熱ノ湯ニ浴スルヲ以テ順序トス」

むし湯の中で右回りに一周してしっかり汗をかいたあとは、「七瀑」(七筋の滝の意味か)で患部の打たせ湯を行い、さらに渋の湯、熱の湯と入浴するのが順序というのだから、現在とはかなり違った入浴作法があったのだろう。(続く)

## No990 鉄輪物語

兎狩湯と呼ばれた熱の湯 明治21年の解説書より天候で色が変わる渋の湯



国立国会図書館の近代デジタルライブラリーで公開されている、明治21年「鉄輪蒸窖及両温泉分析並医治効用」という案内書から、湯治の鉄輪のむし湯などの様子を探っている。渋の湯や熱の湯についても、興味深いことが記されている。



「渋ノ湯ハ寒暖晴雨ニ因テ其湯色ヲ変ス亦奇ト謂ヘシ 熱ノ湯ハ身熱ヲ除去スルノ謂ナリ 古之ヲ兎狩湯ト称ス中古以来熱ノ湯ト改称ス」

渋の湯は気温や天候によってその湯の色が変化する不思議な温泉。熱の湯は身熱を取り除くという意味で、古くは「兎狩湯(うかりゆ)」と称していたが、中古の時代から熱の湯と改称した。

ちなみに昔の渋の湯は現在とは向かい合わせ(少し前まであった「元湯」の位置)にあった。

◇ ◇ ◇

「七瀑及諸泉亦皆上人ノ造築ニ係ル 瀑側ニ上人ノ袈裟掛衣掛ニ石今ニ至テ尚存ス 本村モト鹿直村ト称ス 上人温泉造築ノ時ヨリ今名ニ改ルト云」  
七瀑と各温泉はみな一遍上人が築いたもので、滝のそばに上人の「袈裟掛石」「衣掛石」の2つの石が今でもある。  
もともと「鹿直村」と称していたが、一遍上人が温泉を築いた時から今の名前に改めたという。

◇ ◇ ◇

また、むし湯の効能は次の通り。

「蒸窖古来伝称ノ経験効能ノ一 疝癩筋肉ノ痛ム病ノ一 手足屈ミタル病ノ一 身体中潜伏ノ悪熱ヲ発散スノ一 痰氣喘息ノ病ハ窖中痰焼ノ箇所ニ  
就テ蒸混スレハ必ス全治スノ一 瘧症癩癩発●(手辺に畜)ノ病ノ一 手足麻痺ノ病」(続く)

2010年6月21日(月)

## No991 鉄輪物語

熱の湯は垢と汗取り爽快 明治21年の解説書より胃弱は渋の湯の飲用不可



明治21年の案内書「鉄輪蒸窖及両温泉分析並医治効用」(国立国会図書館近代デジタルライブラリーより)を読み進めているが、渋の湯、熱の湯の効用は次のように書かれている。

◇ ◇ ◇

渋の湯の「伝称ノ効能」は「軽症梅毒、痛風、瘰癧、筋肉ノ痛、帯下症、疥癬及ヒ遺毒ヲ発表シ浴スルニ随テ漸々治癒ス本泉ハ溜飲胃痛総テ脾胃ノ弱キ人ハ服用スヘカラス」とあって読みづらいが、軽症梅毒や痛風をはじめいろいろな効能があり、入浴を続けることで徐々に効き目があり、また、脾臓や胃の弱い人は飲むなということらしい。

「医治効用」も合わせて掲載しており、そちらには「神経機能ノ亢進、神経麻痺、婦人生殖器ノ慢性諸病、貧血、重病後ノ快復期、腺病、膀胱及腎臓慢性炎、疝痛、頑癬等ニ適応ス」と神経機能や婦人の生殖器の諸病などに効果があるというわけで、昔からの言い伝えと医者の見方は違いがあるようだ。

◇ ◇

熱の湯のほうは「伝称ノ効能」について、「蒸窖ヨリ出テ七ツ瀑(タキ)ニ浴シ然ル後渋ノ湯熱ノ湯ニ浴スレハ本泉ハ至テ澄明清潔ニシテ身体ノ垢汗ヲ去リ体氣頗ル爽快ナルヲ覚フ」と記していて、蒸し湯→七つ瀑→渋の湯に続いて入浴すれば、透明清潔な泉質で体の垢と汗を取り去り、非常に爽快な気分になるというわけだ。

一方、「医治効用」では、「慢性筋及関節痺麻質私、痛風、炎症後ノ滲出物、神経機能ノ亢進、神経麻痺、婦人生殖器ノ慢性諸病、貧血、重病後ノ快復期、腺病、膀胱及腎臓慢性炎、疝痛、頑癬等ニ適応ス」とリウマチや痛風などへの効果が掲げられている。(続く)



2010年6月22日(火)

## No992 鉄輪物語

湯治客慰める眺望のよさ明治21年の解説書より七ツ瀑ははやり目・頭痛に



明治21年の案内書「鉄輪蒸窖及両温泉分析並医治効用」(国立国会図書館近代デジタルライブラリーより)をひもとき、できるだけ古い時代の鉄輪の温泉のことを知ろうとしているが、「七ツ瀑(ナナツタキ)」の効能は次の通り。

◇ ◇ ◇

「伝称ノ効能」は「ハヤリ目、ノボセ目、頭痛、眩暈、肩腰ノ痛ミヲ治ス 但シ頭痛眩暈ノ病人ハ最初ヨリ直ニ上部ヲ搏撃スルハ宜シカラス 先ツ全部ヨリ始メ漸々上部ニ及ヒ終リニ頭上ニ至ルヲ宜トス」とある。頭痛やめまいの病人は、最初から頭から浴びるのではなく、全身に浴びて少しずつ上部に移り、最後に頭に浴びるのがよいと注意を促している。

◇ ◇ ◇

案内書にはほかに「鉄輪村地勢概略」の一文もあり、天気の良い時には船の往来が見えたりして海の眺めがよく“入浴患者”の気持ちを慰めてくれるといったことが書かれている。

さらに「鉄輪名勝」として、「タウチの地獄」「海地獄」「鬼地獄」「紺屋ノ地獄」「坊主地獄」「血ノ池地獄」の6ヶ所が挙げられ、ほかに温泉社、菅公社、歳神社、稻荷社、温泉山、西派真宗掛所、鶴輪学校の名前も記されている。

「鉄輪物産」としては青筴、苧麻、生姜、芽生姜、大唐米、樫実、芽赤芋、竹細工、白土、湯ノ花が挙げられている。

◇ ◇ ◇

なおこの案内書の出版日は明治21年12月8日で、編集・発行・印刷人は大阪の川崎幾三郎となっている。その他専売所として地元の名士の名前が列ねられており、「豊後国速見郡鉄輪村 安波利一 加藤新六 原雄三郎 平川角太郎 佐原数太郎 佐原亀太郎 加藤浦太郎 原平八 安波謙吉 安波七蔵 大野嘉六 松尾一真」となっている。 2010年6月23日(水)

## No993 鉄輪物語

ユニークな4階建て旅館筑後屋昭和初期に新館 別荘も



鉄輪の古い旅館の一つが筑後屋。新しいむし湯の西側、旅館上富士屋の駐車場になっている所が筑後屋本館があった場所。唐破風の風格ある玄関を持つ木造3階建て旅館だったが、戦前は4階建てのユニークな建築物だった。

◇ ◇ ◇

もともと2階建てだった旅館を大正時代に4階建てにしたのが原蘇七(昭和18年11月5日没、69歳)。

かつて筑後屋には子供がなかったため、萬屋(よろずや)旅館から養子にきた蘇七と、新屋旅館の長女初枝(ハツエ)が取り子取り嫁で後を継いだ。その時、筑後屋には大平屋出身の養母がいた。

4階部分には8畳の客間が2部屋あったが、さぞかし眺めがよかったことだろうと思われる。ただし、無理矢理に建て増したために、台風時にはギーコギーコときしんでいたという。危険だということで戦後になって4階部分は取り壊した。その後、全体を取り壊したのは昭和59年か60年頃のことという。

蘇七は初期にはいでゆ坂ぞいに3階建ての筑後屋新館(現在の筑新)も新築した。ほかに大黒屋の裏手に筑後屋別荘も建てた。筑後屋本館は蘇七の長男誠治が継ぎ、次男良三が筑後屋新館を継いだ。(続く)

◇ ◇ ◇

※掲載した明治43年「新撰南豊温泉記」の広告には「豊後鉄輪温泉場／入湯御宿／筑後屋旅館／一、当館は、土地高燥にして、四方の眺望絶景、空気流通、又佳良なり。／二、当館は、温泉場中央の位置にして、他に比類なき、蒸湯の前にあり。／三、庭内に、本泉同質、特効の内湯、並に温炉室等の設備あり、避暑避寒共に適す。／四、旅客に対し、最も懇切丁寧、且つ安価廉格を旨とするは、当館の特色なり。」と記されている。眺望の良さに加えて空気流通がよく衛生的であること、人気のある蒸し湯のすぐ近くにあるという立地のよさ、内湯やオンドルの設備、安価な料金などを特徴としてPRしている。

※掲載した大正時代の絵葉書は、以前のむし湯側から撮影したもの。唐破風の玄関も見える。

※蘇七の「蘇」は、本当は「魚」と「のぎへん」の位置が逆。2010年6月25日(金)

## No994 鉄輪物語

仕事は呑んでかかれ 筑後屋独特な格言吐いた原蘇七



大正時代に筑後屋旅館を4階建てに増築し、さらに昭和初期に筑後屋新館を新築、また筑後屋の別荘も建てた原蘇七。

筑後屋本館を継いだ長男誠治の長男で、おとし9月まで旅館三晃を経営していた原寛孝さん(80)によると、早起きの働き者で、学問はしていなかったが、独特な教訓を吐くような人物だったという。

「小学校5、6年頃にじいさん(蘇七のこと)に田植えに連れて行かれた。『田んぼを見ろ。よだきかろう。何でも仕事をする時に仕事に呑まれるな。呑んでかかれ。一畝一畝やっていけばいつか終わる』とそういう話をしてさぼれないようにしておいて、終わったら全員の前で熱心だとほめてくれました。ほかに



『お前たちは工面(工夫のこと)が足りない。人間は思い立ってできないことはない』とも言っていました」

酒はよく飲み、人にも飲ませた。天神様の総代などはしたが、議員といった朝日村の役職はしなかった。

原さんは「畑仕事をよく手伝わされました。一方、ばあさん(初枝)はたくわんを浸けたり、味噌を作ったり。大豆を煮てつぶすが、ミンチにする係が私で、独特の臭いには辟易しました」と思い出を語っている。

◇ ◇ ◇

ところで、旅館三晃の土地は、農協の前身の朝日産業組合(もっと前は朝日信用購買生産販売組合)が事務所がないというので蘇七が寄付したものでしたが、昭和29年に買い戻し、翌30年に旅館を建てた。その敷地は今年3月にオープンした別府市の地獄蒸し工房鉄輪に生まれ変わっている。(続く)  
2010年6月26日(土)

## No995 鉄輪物語

### 昔の鉄輪は半農半商 筑後屋新館は昭和4年9月落成か



原寛孝さんは昔の鉄輪について、「じいさん(原蘇七)の時代は半農半商」と説明する。大正期までは宿屋業といっても半分は畑や田を耕していたというわけだ。

また従業員も「近所の農家の娘さんが行儀見習いを兼ねて働いていた。だから給料もなかった」。

ところで、筑後屋の屋号の由来は、「筑前屋と土地を交換したらしい。筑前屋が先に商売をしていたので、その後から旅館を始めたという意味で筑後屋と名づけたと聞いている」。それ以上のことはわからないという。

◇ ◇ ◇

※宿ごとに毎月の宿泊者数を記した統計資料(「鉄輪温泉使用料金徴収人員各月宿屋別表」)には、昭和4年9月から新館の宿泊者数が掲載されており、これが筑後屋新館の落成時期だったと考えられる。

6年分が存在するこの資料によると、筑後屋の宿泊者(昭和4年以降は新館を合計した数)の推移は大正2年6704人、同12年1万3411人、昭和3年1万644人、同4年9508人、同6年7515人、同7年7581人となっていて、意外なことに大正12年が宿泊者数のピークだった。



◇ ◇ ◇

※掲載した原蘇七・初枝夫婦(2列目右端と左端)を囲んだ家族写真の人物は、後列左から孝(五男)、敬三(三男)、誠治(長男)、文子(誠治妻)、カスミ(良三妻)、良三(次男)、務(四男)。誠治の前が緑老(ろくろう、六男)。原寛孝さんと妹曾枝子さんは最前列。

※大正12年「豊後温泉地旅館名簿」には開業年が明治34年7月11日、電話番号が47番、経営者名が原蘇七と記されている。 2010年6月28日(月)



## No996 鉄輪物語

私財投じ鉄輪道を整備 ときわや加藤新平“大石”の傍らに頌徳碑



いでゆ坂沿いの現在ヤングセンター駐車場になっている場所が、鉄輪を代表する老舗旅館の一つ「ときわや」(常盤屋)の跡。  
ときわやの加藤家中興5代目が新平＝文化12年(1815)―明治23年(1890)＝。公共事業に尽くした人物として頌徳碑が建立されている。俳句の号が秋波、画名は鼎山で趣味の多い人物でもあったようだ。

◇ ◇ ◇

鉄輪から別府大学方面へと下る道路から、右に分かれ中須賀公民館方面へと向かう道が「鉄輪道(かななわみち)」と呼ばれる古い道。

分岐点からまもなく通り沿いに巨大な「大石」があり、傍らに「加藤新平翁頌徳碑」が建っている。

「別府市誌」(昭和60年版)の説明によると、ここは江戸時代の南鉄輪村、平田村、北石垣村の村境だった。頌徳碑は新平翁が亡くなって27年後の大正6年3月に北須賀組の人たちが建てたもので、碑文によると、石垣村北須賀から鉄輪に通じる道路が荒廃して人馬の交通に苦しんでいたのを嘆き、道路開さくを企てて私財を投じた。おかげで北須賀―鉄輪間の交通が大いに短縮されたことを、「翁の賜なり」と深く感謝している。

◇ ◇ ◇

少し前に掲載した明治21年の案内書「鉄輪蒸窖及両温泉分析並医治効用」の出版も新平翁が提唱した。

本の題字では翁の略歴を紹介し、幼い頃は貧しかったが努力して家を隆盛に導いた。一方で、暇ができてからは読書し、俳句や生け花、絵を学ぶ趣味人でもあった。温泉事業にも尽くし、戸長もつとめたと記している。(続く) 2010年6月29日(火)

## No997 鉄輪物語

しこ名は“常盤崎” ときわや加藤新六いでゆ坂沿いに弟子らが墓碑



老舗旅館ときわや(常盤屋)加藤新平のあとを継いだのは長男新六＝大正10年(1921)10月4日没、享年83歳＝。

いでゆ坂沿いの共同温泉「地獄原温泉」とたまの荘の間に「常盤崎加藤新六墓」という墓碑が建っている。「時津風内九州頭取」、「明治二十六年三月穀旦 諸弟子共立焉」という文字も刻まれていて、さらに土台部分には弟子たちなのだろうか、たくさんの人名が並んでいる。

新六は体が大きく相撲好きで、しこ名が常盤崎だった。時津風というのは、戦前69連勝したことで知られる宇佐出身の双葉山が引退後に襲名したが、もともとは大阪相撲の名跡だった。

頭取という言葉は文字通り「長たる者」で、辞書によると「相撲取りの取り締まりをする人」という意味がある。おそらく大勢の弟子を育て、村相撲を開いたりしていたのだろう。

明治 26 年 3 月 吉日に弟子たちが共同で建立したと記されている。(続く)

◇ ◇ ◇

※墓碑建立の明治 26 年には新六はまだ 50 代で健在だったが、「墓」とはどういうことだったのだろうか。

※加藤家の血筋は体格がよく、現在の 10 代目当主義矩さん(65)も 180センチの長身。 2010 年 6 月 30 日(水)

## No998 鉄輪物語

明治 19 年に正式開業 ときわや湯の花や野菜促成栽培も



ときわやは江戸時代から宿屋業をしていたようだが、明治 19 年に「別府組合駅伝旅人宿」の許可を得て正式に開業した。

その頃に作ったものと思われる古い旅館の看板が現在も残されていて、1枚板の両面に「入湯御宿 常盤や本家 大分県鉄輪村 加藤新六」と記されている。

なお、新六(6代、大正 10 年没)は常盤崎のしこ名を持つ相撲好きとして、前回登場した。鉄輪村は明治 8 年—22 年の村名。

◇ ◇ ◇



次の 7 代録三郎は新六の三男で、昭和 8 年 1 月 8 日に 73 歳で亡くなっている。大正 5 年「大分県実業家名鑑」には「御旅館ときわや 鉄輪温泉加藤録三郎」と名前が掲載されている。

また宿ごとに毎月の宿泊者数を記した「鉄輪温泉使用料徴収人員各月宿屋別表」では、大正 2 年度は録三郎の名前で宿泊者数が掲載されており、同 12 年度では称司(8代)の名前に変わっている。この資料での宿泊者数の推移を見ると、年度ごとに 4659(大正 2)→6444(同 12)→5940(昭和 3)→4543(同 4)→4192(同 6)→2961(同 7)となっている。

大正 12 年「豊後温泉地旅館名簿」には電話番号が 30 番、経営者名は加藤称司と記されている。開業年は大正 9 年 6 月 1 日となっており、称司が経営を引き継いだ時期を示しているのだろう。(続く)

2010 年 7 月 1 日(木)

## No999 鉄輪物語

旅館の歴史 5 百年!? ときわや永福寺の再興にも尽力





老舗旅館ときわやの歴史をたどっているが、今回はちょっと足踏みしていくつかの情報を追加しておきたい。

◇ ◇ ◇

大正6年「大分県人名辞書」にときわやの中興8代加藤称司のことが次のように掲載されている。

「加藤称司(速見郡朝日村)鉄輪温泉『常盤屋旅館』主人也。(明治十三年生)其業後宇多天皇の朝鉄輪温泉開設と共に祖先の創始に係り、子孫累世襲業、星霜五百余年を経て今日に至る。蓋し同業中異数の老舗たり。建築雄偉、設備完全、四時の浴客絶ゆるなく、年客約五千人を算す。」

ときわやの旅館業は明治以前から続いてきたとされているが、この本では後宇多天皇(在位期間1274年—1287年)の時代から500年以上も続いている「同業中異数の老舗」と述べている。また前回、「豊後温泉地旅館名簿」で開業年としている大正9年を先代録三郎から称司に経営が引き継がれた時期と推定したが、この本が書かれた時期にすでに称司が旅館主になっていたということなのだろうか。

◇ ◇ ◇

明治35年「新撰豊後温泉誌」には「旅館の重なるものを挙げれば富士屋、萬屋、常盤屋、辰巳屋其他十数軒あり」とあり、常盤屋(ときわや)など数軒が主だった旅館とされていたことがわかる。

なお、前回掲載した明治43年「新撰南豊温泉記」の広告には、「豊後鉄輪温泉場／入湯御宿 湯の花製造所 蔬菜促成栽培所 ときわ館／本館は、新湯の南側にあり、土地高燥にして、階上の眺望絶景、殊に特効の庭内温泉あり、一浴して疲を散せしむるに足る。海地獄、洗湯公園、遊覧上、尤も至便の位置にあり」と記されていた。旅館業以外に、湯の花製造や温泉熱を利用した野菜の促成栽培も手がけていたことがわかる。

◇ ◇ ◇

温泉山永福寺は明治初年に廃寺となり再興されるまでに大変な努力が必要だったが、ときわやも先頭に立って力を尽くした。永福寺先代住職の残したもののなかに加藤新平、新六のことを書いた一文がある。

「加藤新平氏は常盤屋旅館五代中興の祖と同家過去帳に記載されて有り。寺再興の為大いに尽力された。(中略)又六代目新六氏は先代の後を継ぎ現在の永福寺再建に協力者の先頭に立ち尽され完工す。」(続く) 2010年7月2日(金)



## No1000 鉄輪物語

### 朝日村の第10代村長 ときわや旅館8代目の加藤称司

ときわやの中興8代が朝日村村長としても活躍した加藤称司=昭和43年(1968)9月15日没、=。先代録三郎に子供がなく、別家泰造4男だった称司が養子となった。10代目の朝日村村長(昭一同9年4月)を4年間つとめ、温研(九州大学温泉治療学研究所)誘致や温泉改築などをした。



享年 85 歳  
和5年4月

掲載写真のうち1枚は、3町村の役場職員・家族の慰安会の記念撮影で、前列左3人目から加藤称司朝日村長、矢田保石垣村長(子供を抱いている)、篠崎豊彦亀川町長。画面左側の白い構造物がユニークなヒョウタン型だった瓢箪温泉の瓢箪閣。昭和10年9月に別府市と合併する以前にはこのような形で3町村が交流をしていたのだろう。(続く)



※本連載981回(6月10日)で朝日村の歴代村長を列記した(2003年度版「別府市誌」による)。朝日村の議事録などを調べた郷土史研究家外山健一さんのご教示によると、かなり食い違いがあることがわかった。また加藤称司まで10代にわたって地元名士が務めたが、別府市との合併までの1年余りは村外の人が村長代理を務めるなどしていたことも明らかになった。改めて歴代村長を掲載する。

松川儀八(明治22年8月—25年11月)、佐藤政一(26年5月—27年5月)、直江重次(27年6月—31年6月)、加藤累三(31年7月—35年7月)、佐藤政一(35年7月—37年7月)、加藤累三(37年7月—45年1月)、西山吉郎(45年1月—大正14年3月)、加藤永次(14年4月—昭和2年1月)、直江忍(2年1月—5年3月)、加藤称司(5年4月—9年4月)、中島真登(9年8月—同11月)、職務管掌(県属)として夏田武男(9年11月13日—10年1月13日)、臨時村長代理として吉村政治郎(10年1月18日—9月3日) 2010年7月3日(土)

## No1001 鉄輪物語

### 原野や松林が大変貌 ときわや温研誘致に尽力した加藤村長



加藤称司村長の任期中(昭和5年4月から9年4月まで)の大きな出来事といえば、昭和6年の温研(九州大学温泉治療学研究所)創設。その誘致にも尽力した。

温研の敷地3万坪のうち、2万坪は荘園を開発した国武金太郎氏が朝日村と石垣村に2万円を寄付し、両村が県有の松林を払い下げてもらって寄付した。



創立25周年記念「温研タイムス」(昭和31年11月発行)に温研の生みの親、小野寺直助氏(第3代所長)が当時の事情を次のように記し、また加藤村長らへ感謝の気持ちを表している。

「丁度その時朝日、石垣両村の村長から、現在の鶴見ヶ丘に二万坪を無料寄付するから、研究所をこちらへと誘致交渉がありました。それは鶴見原に住宅地の経営を始められた久留米市の国武金太郎氏(今は故人となられた)が二万円を両村に寄付し、それで県有松林を二万坪払い下げて寄付してくれるという申出がありましたので、秘密裏に交渉を始め、現在の所に設立すると決定して発表しました。(中略)後に九大医学部恵愛団から一万円を支出して隣接松林一万坪を買い求め、これを温研に寄付しましたから、現在の温研敷地は三万坪であります。この時骨を折って下さった加藤称司村長、矢田保村長が二十五年の今日御元気で、本日の祝賀会に御出席下さったのは感激にたえません。」



同誌には加藤村長も「懐古」のタイトルで一文を寄せている。

「光陰矢の如しと実に歳月の流れるのは早きものにして、温泉治療学研究所が創設せられて茲に二十五週年を迎ふ、当時の関係者として誠に欣快に堪へざるなり。」と書きだし、この地が石垣原合戦で倒れた多くの武者の霊が眠る場所であることに深く思いを致し、時を経て賑やかな住宅地として日本随一の温泉治療学研究所として繁栄していることに「地下に眠れる英霊も定めし喜ぶならん。」と記している。

◇ ◇ ◇

村会議員だった加藤●(糸へんに丸)氏も「誘致運動の頃の思い出」という興味深い一文を認めている。「その頃—即ち昭和四年と云えば現在の場所は、まだ速見郡朝日村鶴見原と云っていた。／朝日村村会議員たる私共は、久留米の財閥国武金太郎氏が九大温研の誘致を考えていると云う噂を聞いた。朝日村発展のため大いにやろうと云うことになったが」…。半信半疑のまま国武氏の人物を確かめるために村議一同で久留米の邸宅を訪ね、その豪壮さに驚いて誘致運動を本格的にやることになったという思い出を書き留めている。(続く) 2010年7月5日(月)

## No1002 鉄輪物語

### 離れに住んだ大谷光瑞師 ときわやなるみ高岸源太郎とも交流



鉄輪の大谷公園は、浄土真宗本願寺派第22代法主の鏡如上人・大谷光瑞師(1876年—1948年)の終焉の地。昭和25年5月に建立された「光瑞上人遷化之处」の石碑やのちに建てられた大谷探検隊の記念碑も目を引く。

仏蹟調査のため中央アジアに3回(うち1回は自ら参加)も派遣したのが大谷探検隊。上人はさらに政治・経済・教育などの分野でも多大な業績を残した桁外れにスケールの大きな人物だったようだ。

昭和22年に病氣療養のため別府に滞在し、翌23年10月5日鉄輪の別荘で没した(享年73歳)が、大谷公園はその別荘があった場所。

◇ ◇ ◇

上人は当時の脇鉄一市長とも親交を結び、請われて別府市の将来像について提言も行っている。

昭和62年「本願寺別府別院誌」には上人が訪ねてきた脇市長に「観光地として発展させるには世界を廻って感じたことだが、『別府(ベップ)』という読み方は発音が難しい。『速見』と改称した方が外人にも読み易く、また国際的だ、そして別府港がせまいからあれを大きくやりかえて、全世界の観光客を呼ぶような計画を建てることだ。」と提言したエピソードも紹介されている。

◇ ◇ ◇

最初に旅館ときわやの離れにしばらく滞在したが、その後、料亭なるみの経営者として有名な高岸源太郎が所有地に建てた別荘に移った。遺志により、没後に別府市に寄付され大谷公園となった。



別荘は本願寺別府別院に移設されて保存されていたが、今はない。

◇ ◇ ◇

なお、高岸源太郎は昭和 26 年 2 月 15 日死去(享年 75 歳)。昭和 35 年 2 月同公園内に宇都宮則綱、加藤称司らによって翁の頌徳碑も建立された。碑の裏にはなるみを経営して名を成したと、別府の宣伝と公共事業に尽くしたことを称え、「本公園土地も亦翁の寄贈によるものなり」と記されている。

(続く) 2010 年 7 月 6 日 (火)

## No1003 鉄輪物語

農協前身の産業組合長も ときわや加藤称司新別府分譲会社で監査役



時間は前後するが、ときわやの加藤称司は朝日村村長(昭和5年—同9年)をつとめる以前に、現在の農協の前身である産業組合の組合長もつとめた。大正 13 年の書物(「速見郡郡制史」)に掲載された人物紹介によると、その当時村会議員や温泉委員、道路委員のほか、新別府の分譲地を開発した新別府温泉土地株式会社の監査役などいくつかの会社の役員も兼ねていた。

掲載した写真は今年別府市が作った地獄蒸し工房鉄輪(元旅館三晃の位置)の場所にあった産業組合(朝日信用購買生産販売組合)の事務所落成記念と思われる記念写真で、右から2人目が加藤称司。大正 11 年頃の撮影。

もう1枚は北中にあったさらに古い事務所の内部の写真で、撮影は大正6年頃。奥に立つ人物が加藤称司と思われる。(続く)

◇ ◇ ◇

※「速見郡郡制史」掲載の「朝日村／産業組合長 加藤称治氏(※称司の誤記)」の文章は次の通り。

「本村第一流の人にして声望高く地方発展に寝食を忘れ義気胸宇に溢る 村会議員、温泉委員、道路委員等の公職に在り又新別府土地株式会社監査役、別府温泉株式会社重役、泉都紡織株式会社常務取締役、消防組頭、青年会及婦人会の顧問等にして毫も職責を緩ふせず」

続けて「氏の生命として掌れる朝日産業組合は夙に模範組合と指され其成績は常に県下第一位に居れり 曩に農商務省に於て全国六十組合の選奨を行ひしとき優に其選に入れり 氏は其組合長也」とある。

2010 年 7 月 7 日 (水)



## No1004 鉄輪物語

豊田海軍大將は小学同級 ときわや加藤称司野口雨情ら著名人とのスナップ



村長という役目柄もあり、ときわやの加藤称司は著名人を海地獄などにたびたび案内した。このうち、童謡「シャボン玉」や「赤い靴」の作詞で有名な詩人、野口雨情を海地獄に案内した



写真は昭和9年春

(右端が加藤称司)。

現在鉄輪には「豊後鉄輪むし湯のかへり はだに石菖の香が残る」の歌碑が、地元の町作りグループ鉄輪愛酎会の手で建立されている。

同じ海地獄へ柳沢保恵伯爵を案内した写真は昭和7年春(加藤称司は右から2人目)。柳沢伯爵は貴族院議員、統計学者で第一生命の社長もつとめた。なお、写真中央ではちきれんばかりの笑顔を見せているのは油屋熊八。

杵築市出身の重光葵は外交官、政治家。太平洋戦争が勃発した昭和16年12月に駐支大使に任じられているが、掲載写真は翌17年1月4日に別府の東洋軒で撮影したもので、中国への赴任を見送る宴会だったようだ。加藤称司(最後列中央)は重光の後ろの後ろに立っている。なお、写真には東洋軒にHTMLの編集贈られた「誠者天之道也／為宮本君／重光」と重光が揮毫した額が合成写真で写っている。

同じ杵築出身の豊田副武海軍大將は、日出高等小学校で加藤称司と同級生だった縁で、たびたびときわやを訪れた。この写真は昭和14年2月の撮影。

朝日小学校に高等科がない時代には、鉄輪から日出まで通学することもあったようだ。(続く)

2010年7月8日(木)

## No1005 鉄輪物語

### いち早く離れ形式を導入 ときわや鉄筋への建て替えも最初



ときわや旅館の大きな特徴は加藤称司の時代に、離れ形式を取り入れたことで、別府でも最初と言われるほどだった。広い庭の中にそれぞれ浴室付きの1号、2号、3号などと呼ぶ離れがいくつか建っていた。戦後、大谷光瑞が暮らした離れの前には「光瑞上人記念之家」と彫った石も置かれた。

旅館あとは現在ヤングセンターの駐車場になっているが、ずっと奥までときわやの敷地で、千坪あった。

◇ ◇ ◇

9代目は称司の次男正義(平成12年没、享年82歳)で、戦前は中国で税関吏をしていて、長男義矩さん(65)＝10代＝は終戦前年に上海で生まれた。

ときわやは鉄輪でもいち早く、昭和30年代に鉄筋コンクリートに建て替えた。また温研での人間ドックとセットにした先進的な宿泊プランも昭和40年代に他の旅館と組んで実施していた。



市議員もした妻久美子さん(61)はときわやの特徴を「先取性」という。「温研の誘致をはじめ、離れ形式の旅館にしたのもときわやが最初。鉄筋にしたのも鉄輪では最初、人間ドックで客を呼んだのも先進的だった」。ただ「駐車場がなかったため、自動車の時代に合わなかった」と残念がっている。

◇ ◇ ◇



ところで、おじゅうさんと呼ばれた称司の妻従(じゅう、昭和 58 年没)は 97 歳まで長生きした。馬場の西山家の出身で、京都の学校を出ていて先生もした。称司が芸者を連れて帰宅しても小言一つ言わず芸者に小遣いを渡すような人だった。晩年も好奇心旺盛で、虫眼鏡で新聞を隅から隅まで読み、家族が「どこかに連れて行こうか」と誘うと断ることがなかったという。

○ときわや旅館については今回で終わります。次回から萬屋旅館を取り上げます。 2010 年 7 月 9 日(金)

## No1006 鉄輪物語

### 明治期に早くも3階建て 萬屋旅館江戸中期創業の老舗宿



昭和 40 年代まで現在のヤングセンターの位置に、鉄輪でも屈指の老舗旅館「萬屋(よろずや)旅館」があった。

いでゆ坂沿いでよろずや薬局を営む子孫の原敏久さん(61)によると、旅館業は江戸中期から。「皇族の流れの方もお泊まりになっていた。籠もありました。下関、博多の豪商、田川の市長など客筋がよかった」。「博多の人たちが泊まりに来ると、玄関前で鉦や太鼓を叩いて“どんたく”を披露し、鉄輪中の人が見に来ていました」。



昭和初期ごろ建て増した南側の棟を含めいくつかの建物があつたが、3階建て部分は古く、明治 35 年に発行された地図を見ると、すでに萬屋が3階建てであるのが確認できる。



別府八湯全体でも、旅館の3階建てが盛んになるのは大正期から。明治期にはまだ少なかった。

実現はしなかったが萬屋旅館を文化財に指定するという話があつた。南側の棟が比較的新しくつたために文化財にならなかったと原さんは聞いているが、自衛隊の車が突っ込んで玄関を壊してしまったためとも言われている。

明治 43 年発行の「新撰南豊温泉記」掲載の広告には「又眺望は高燥の三階建なれば」とあつて、3階からの眺望のすばらしさを強調している。(続く)



※広告の文面は次の通り、「豊後鉄輪温泉場／入湯御旅館(適性閣事)萬屋／当館の特色は、清潔なる内湯、並に地下より蒸沸する、温爐室の設備あり。避暑、避寒、入浴に適す。又眺望は高燥の三階建なれば、鶴見、扇子、高崎、姫見、双子、文珠等の諸山、豊後湾の沿岸は素より、四国に至るまで、雙眸に落ち来つて、養病に最適當の、好位置にあり。」

※掲載した萬屋の写真は時代を経て色あせているが、左端に萬屋旅館の看板を取り付けた大きな石の門柱があり、右端には正月らしい飾り付けをした玄関が写っている。

2010 年 7 月 10 日(土)

## No1007 鉄輪物語

### “鉄輪の萬屋てふに宿りぬ” 萬屋旅館嘉永5年飯塚からの旅行記



幕末の嘉永5年(1852)飯塚の商人、小林重治が認めた鉄輪旅行記「豊後の道の記」に、「鉄輪の萬屋てふに宿りぬ」と萬屋旅館に投宿したことが記されている。

◇ ◇ ◇

実はこのことは桑原廉靖著「大隈言道と私」(01年、海鳥社)の中の一文「『豊後の道の記』を辿る」に書かれている。小林は福岡出身の江戸後期の歌人である大隈言道の弟子で、「豊後の…」にも大隈が序文を寄せている。

桑原さんは小林直筆の「豊後の…」を入手したことから、その旅のあとをたどって平成10年に鉄輪を訪れ、萬屋旅館子孫であるよろずや薬局にも立ち寄っている。なお大隈の研究者であった桑原さん(福岡市)はすでに故人となられた。

ご長男の許可をいただき、以下「大隈言道と私」から引用させていただく。

◇ ◇ ◇



——嘉永五年弥生七日、豊後の国鉄輪に湯浴みに行くとなにくれのことどもしたため旅立ちす、おのれ四十に近けれどまだ子の無きを、ちちははをはじめ憂きことに思ひしかば、『今弥生のはじめ、空ものどやかなり、妻なるものを連れて、かしこの御湯になど入らば悪しくはあらじ、とく思ひたて』などの給ふまにまに、惣十といふをのこと三人にて出たちぬ——

これについて、桑原さんの解説は次の通り。「さて、旅立ちである。嘉永五(一八五二)年の弥生七日は、太陽暦では四月二十五日であることがわかった。今なら連休シーズンに入る若葉のよい季節である。四十歳近くなっても嫡子が生まれないことに両親や周囲がやきもきして、気候もよいくらだからと、子宝が授かる効能のあるという別府の鉄輪温泉行きを勧めたわけである。重治は留守中のことなどを書き置きする。長い旅に出ることにはためらいがあっただろうが、まだ両親がしっかりしていたのかも知れない。」(続く) 2010年7月13日(火)

## No1008 鉄輪物語

### “石風呂”入浴も体験 萬屋旅館・嘉永5年の旅行記飯塚から5日かけて到着



萬屋旅館投宿の記述がある、嘉永5年(1852)小林重治の旅行記「豊後の道の記」について、桑原廉靖著「大隈言道と私」から紹介している。

◇ ◇ ◇

小林は福岡出身の歌人大隈言道の弟子。飯塚で代々酒造業を営み人馬問屋をしていた商人だが、前回も書いたように40歳近くになっても子供ができなかったため、子宝が授かるようにと両親から鉄輪での湯治を勧められた。

旧暦3月7日(4月28日に当たる)に飯塚を出発し、耶馬溪見物や宇佐神宮参拝などしながら5日目の11日にやっと到着している。

◇ ◇ ◇

——かろふじて頭成てふ海辺に出でぬ、船ども多く湊にありて、古市・里屋波打ぎはの浜伝ひの道なり、爰より温泉あり、少しの山を越えて、鉄輪の萬屋てふに宿りぬ、——

頭成は豊岡の地名。里屋は亀川のこと。波打ち際の道をたどり、亀川からは山を越えて、鉄輪の萬屋という旅館に投宿したというわけだ。

◇ ◇ ◇

——十二日、石風呂てふ温泉に身を暖めける(中略)遠近より湯浴みの人集ひて多ければ、心のままにも入り難し、人を待つことなり、石風呂のうちは暗く、かすかに灯をともしけり、口に余のことを言はず仏の御名を唱へつつ、たはれたる事なし、石菖てふ草しきて石の枕に寝ることなり、一人出づればかはりの人入るなり、男も女も髪はおどろにしてあさましき姿なり——

到着した翌日にはさっそく“石風呂”(むし湯のこと)を体験しているが、入浴客が多くて順番待ちをした。暗い室の中ではひたすら仏の名前を唱えるならわしだったようだ。

なお入浴客が髪が乱れて見苦しい姿であることについて、不愉快に感じたようだ。

続けて“七筋の滝”(うたせ湯)や渋の湯、熱の湯のことも書き記している。地獄窯については乞食がシラミを蒸し殺したあとに、村人が野菜を蒸すのを見てあきれたようだ。

——滝の湯とて、鉄輪地獄より湧き出づる流れぬるみて七筋の滝と落ちける、その下に人みて打たるることなり、渋湯・熱の湯とてあり、熱の湯は里人の呑み水になるとぞ、湯けぶりいくつもある中にも、滝の湯の前の湯けぶりに、袖乞ひが衣のしらみてふ虫を蒸しころしけるあとにて、里人青菜を蒸しけり、ものを忌まざる処と見えたり——

永福寺(当時は松寿寺)で法話を聞いたことも次のように書いている。

——爰の御湯をひらきし一遍上人の寺時宗なれども、親鸞上人みづからうつし玉へる御影を掛け、真宗の法を説き、湯浴みの人に聞かす、己も聞きに行きて——(続く) 2010年7月14日(水)

## No1009 鉄輪物語

立派だった照湯を見物 萬屋旅館・嘉永5年の旅行記北中庄屋伊嶋重枝とも交流



飯塚を嘉永5年(1852)3月7日(新暦では4月25日に当たる)に出発し、11日に鉄輪の萬屋旅館に投宿した小林重治だが、22日に鉄輪を離れるまでの間、退屈の余り同宿の人々と酒を飲んでおしゃべりをしたり、故郷を懐かしんで歌を詠んだりしている。



ほかに小船で日出を訪れソテツで有名な松屋寺見物などもした。北中村庄屋から森藩勘定奉行にまでなった伊嶋重枝と親しくなり照湯見物もしている。照湯は天保時代に森藩主が整備させた立派な温泉場だった。

——廿日、重枝ぬしを訪らふ、来りける新温泉照湯といふ、近き年国の守より御再興ありけるよしにて、伊予の湯桁の数ならねど湯壺数多に、また蒸し風呂・湯の滝などその結構言ふもさらなり——

湯壺も多く、蒸し風呂や滝湯も立派で小林も感心しているようだが、別府市誌(2003年度版)によると、この年のうちに立派な温泉場は「祓川の氾濫により壊滅的な打撃を受け諸施設は破壊され」てしまっている。

翌日も小林と伊嶋は一緒に終日酒を飲み歌を詠み交わしたりしている。

伊嶋重枝は元の名前が直江雄八郎。入江秀利著「天領横灘ものがたり」に「鶴見北中村の庄屋から抜擢されて、頭成代官を振り出しに森藩の勘定奉行にまでなった人である。弘化二年、照湯温泉を藩費で復興した機会に、絵師の江川吉貞とともに鶴見の風物を紹介した画帳『鶴見七湯廻記』を世に出した。」と紹介されている。小林が会った翌年(嘉永6年)に76歳で没した。



小林はその後、鉄輪を離れて別府に移り、さらに海路小倉まで戻り、4月3日に約1カ月ぶりで帰宅している。(続く)



※すでに紹介したように小林重治の旅行記「豊後の道の記」は、桑原廉靖著「大隈言道と私」から引用させていただいた。桑原さんが亡くなってご遺族が資料を整理し、現在は福岡市総合図書館にある。

※前回掲載した萬屋旅館の版画は「鉄輪村」とあることから、明治8年—22年に印刷されたものであることがわかる。

2010年7月15日(木)

## No1010 鉄輪物語

江戸期の宿帳や落書きも 萬屋旅館明治に宿をPRLした雄三郎



幕末の嘉永5年(1852)に萬屋旅館に投宿した人の旅行記を紹介してきたが、かつては宝暦年間(1751—63)の宿帳もあつたり、天保などと書かれた落書きがあつたりして、萬屋の江戸時代からの歴史を語るものが残っていた。勤皇家の長三州をかくまっていたとの言い伝えもある。



原敏久さん(61)も「昔は蔵に宿帳がいっぱいありました。鹿の角の刀置きは今でもうちに残っています」と話している。

◇ ◇ ◇

家系は近いところでは、原佐一(明治12年没)・スナ(大正元年没)夫婦の子供が雄三郎(明治26年没、48歳)と正六(昭和6年没、60歳)、筑後屋旅館に養子に行った蘇七(昭和18年没、69歳)の兄弟。

雄三郎の名前は前々回掲載した萬屋の版画に刷られており、積極的に宿をPRしていたのだろう。以前取り上げた古い鉄輪の案内書(明治21年「鉄輪蒸窖及両温泉分析並医治効用」)にも専売所として、安波利一(富士屋)を筆頭に原雄三郎を含め12人の名前が掲載されている。温泉の効用を紹介する冊子を作り入湯客を増やそうという、当時の旅館主たちの意気込みが感じられる。このほか、明治初期に一旦廃寺となった永福寺の再建を願う地元17人の転宗改寺志願証(明治17年)にも登場している。

次の代は弟の正六・キク(昭和18年没、68歳)夫婦。宿泊者数がわかる古い資料「鉄輪温泉使用料徴収人員各月宿屋別表」には大正2年度から昭和7年度までずっと女将の原キクの名前が掲載されている。大正5年「大分県実業家名鑑」、同12年「豊後温泉地旅館名簿」にもキクの名前が記されている。

その次の代は雄三郎の子為直(大正11年没、29歳)と正六の娘アツ(昭和47年没、77歳)の従兄弟同士の夫婦だったが、為直は若くして他界している。(続く) 2010年7月16日(金)

## No1011 鉄輪物語

### 英語やバイオリン演奏も 萬屋旅館ハイカラだった祖父為直



もちろん萬屋は鉄輪では常に一流旅館として数えられており、たとえば明治40年「豊後温泉誌」の鉄輪温泉の項には「旅館数十軒ある中に富士屋、辰巳屋、萬屋などが宏壮な方である。」、大正4年「通俗別府温泉案内」の鉄輪温泉場の項では「二十余軒の旅館中、藤屋(注・富士屋のこと)、萬屋、大平屋、常盤屋などが一流である」とある。

◇ ◇ ◇

さて、原敏久さんの祖父母にあたる為直・アツ夫婦だが、前回は書いたように為直は29歳で亡くなり、アツは若くして後家になってしまった。この為直という人はユニークな人物だったようで、原さんによると「祖父は野球をしたり、英語をしゃべったり、バイオリンを弾いたり、ハイカラな人、新しもの好きな人でした」。

掲載した写真でも、口ひげを蓄え髪を整えていかにもハイカラな風貌。背後に何枚もつり下げている写真は外国風景のように見えるし、バイオリン演奏に使うための譜面立てには英国旗が飾られている。撮影は大正7年前後。



夫婦の一人娘が彩子(大正8年—平成14年)。昭和12年「別府案内」の商工人



◇ ◇ ◇

名録には「鉄輪／萬屋／四六

(電話)／原彩子」と早くも、代表者として彩子の名前が掲載されている。

なお別府旅館協会(昭和12年現在)の名簿では「萬屋／29(室数)／182(畳数)／46(電話)」、「温泉大鑑」(昭和15年現在)では「萬屋／36(室数)／16(収容数)／46(電話)」となっている。(続く) 2010年7月17日(土)

## No1012 鉄輪物語

写真好きだった父 萬屋旅館薬局の開業は明治10年頃



彩子の夫は愛媛県内子町出身の栗田元弘(大正7年—平成19年)で大の写真好き。中央の写真コンテストの常連で賞金稼ぎと言われたほどだった。現在の楠書房の近くにあった後藤カメラに常に出入りしていたという。

もともと日商(日商岩井の前身)に勤務し夫婦で大阪にいたが、シンガポール赴任を命じられたのを機に退職して、鉄輪に戻り旅館を継いだ。

掲載した写真は昭和26年、後藤カメラなどが主催して著名な写真家木村伊兵衛氏を招いた座談会の記念撮影。会場の日名子旅館前で撮っている。



なお栗田家は楠木正成の子孫で、家紋はやはり「菊水」。家系を隠すために姓を「南」(楠から木へんを除いた)としたが、それでもばれることを恐れ「栗田」に改めたというエピソードが伝わっている。

◇ ◇ ◇

ところで萬屋旅館は昭和40年代に改築したが、思うように客が増えず経営に行き詰まって手放すことになった。

一方、旅館の角で営業していた薬局だけは残り、現在も息子の原敏久さん(61)が場所を移してよろずや薬局を営業している。

薬局の創業は明治10年頃。今も保管されている古い販売許可証9枚は、明治31年12月26日の日付で、薬の名前と大分県速見郡役所の名前が書かれている。裏面には、高知、愛媛、宮崎県などの「売薬営業人」の名前とともに、「請売営業人」として原さんの曾祖父の名前(原正六、大分県速見郡朝日村九十三番地)が入っていて、長い歴史を物語っている。 ○萬屋旅館は今回で終わり、次回から辰巳屋旅館を



紹介します。2010年7月20日(火)

## No1013 鉄輪物語

女性も腰巻き姿で湯巡り辰巳屋旅館安政創業で現在6代目





数年前までは元湯、渋の湯、むし湯と3つの温泉施設が目と鼻の先にあるという、世にも稀な場所に建つ辰巳屋旅館。

元湯は4年前に閉鎖され今はポケットパークに姿を変えたが「裏から直接行けた。辰巳屋が持っている、ずっと固定資産税を払っていました」と主人の木村健三さん(66)。

むし湯も移転新築前はすぐ北側にあり、「裸のままで行けた」。「女の人も腰巻きのままで、むし湯、渋の湯、元湯と裸でうろうろしていました」とかつてののどかな湯治客の姿を語っている。



創業は幕末の安政年間(1854年—59年)。初代は平川信右エ門で、太郎太市、角太郎、信勝と続いた。信勝・トヨ夫婦の長女恵美子が佐賀県唐津出身の木村一男(通称は一夫)と結婚して木村姓に。その子健三さんは6代目になる。



平川の本家は鉄輪東にあり、もともと隠居仕事として現在の場所で宿屋業を始めたらしい。

3代目の平川角太郎がやり手だったようで、明治23年の大分県の長者番付表に登場するほど。明治35年「新撰豊後温泉誌」でも「旅館の重なるものを挙げれば富士屋、萬屋、常盤屋、辰巳屋其他十数軒あり」と鉄輪を代表する旅館の一つに辰巳屋を挙げている。掲載したように、同書の広告に「鉄輪温泉場／入湯御旅館／辰巳屋事(こと)平川角太郎」と名前が出ている。

このほか、角太郎の名前は永福寺再建のため地元の人々による転宗改寺志願証(明治17年)に登場し、明治21年の案内書(「鉄輪蒸窖及両温泉分析並医治効用」)にも同書の専売所として掲載されている。(続く) 2010年7月21日(水)

## No1014 鉄輪物語

### 大正期に立派な別荘も 辰巳屋旅館 父母の出会いが温研入院から



辰巳屋旅館3代目、平川角太郎の妻エツは、浜脇の老舗旅館港六(湊六、みなろく)から嫁に来た。非常に教育熱心で、子供たちはいずれも高学歴だった。旅館を継いだ4代目の信勝は慶応大学出身。弟の信義は東北大学を出て、東京理科大学の教授を務めた。

港六から養子(磯沖銀平)が行っていた関係で、別府町長もした磯沖家とはつながりが深かった。

信勝の時代と思われるが、掲載した写真のように立派な別荘も建てた。写真の裏書きに「朝日村辰巳屋別荘工事中」とあり、大正8年10月23日の起工で、大正9年8月25日に仮竣工している。撮影は竣工前の大正9年8月1日に行われた。建物は小山田商店裏に戦後も残っていたという。



ところで、信勝の長女恵美子と結婚した5代目の木村一男は、もともとカラフトで三菱系の製紙工場で働いていた。ケガをして別府の温研に入院中、安楽屋に湯治に来ていて知り合った。左足は金具が入っていて曲げられなかったが、ソ連から障害年金が長い間送ら









※前回紹介した東京理科大学教授の平川信義は改名して淳康と名乗っていた。数学の研究者で、「初等射影幾何学」などの著書がある。

2010年7月23日(金)



## No1016 鉄輪物語

### 「極楽公園」はどこに？古い絵葉書に登場 求む情報提供



今回は、古い鉄輪の絵葉書に掲載された「極楽公園」「子安観音温泉」を紹介する。何かご存じの方がいらっしゃれば、ぜひ情報提供をお願いしたい。



掲載した絵葉書は大正時代か昭和初期頃と思われるもの。「鉄輪温泉場 極楽公園及ビ子安観音温泉」というタイトルで、押されている朱色のスタンプにも「極楽公園 鉄輪子安観音温泉」と書かれている。

画面左端の瓦葺きの建物が浴場らしく、看板に「観音温泉」と書かれているようだ。画面中央の奥が池のある庭園らしく、2人の男性客などの姿も見える。藁葺きのあずまやなどもあり、温泉に入浴するだけでなく、庭を見ながらお茶やお酒を飲んでゆっくり楽しむような施設だっただろうと想像する。

「極楽公園」も「子安観音温泉」も、これまでのところ全く手がかりもなく、お上げの状態。ぜひ、情報を今日新聞までお寄せいただきたい。

2010年7月24日(土)

## No1017 鉄輪物語

### 元湯が渋の湯だった 昔は白濁不透明で硫化水素も



改めて鉄輪の温泉のことを知るために、昔の資料をひもといてみたい。しばらくおつきあいをお願いしたい。



つい数年前まで渋の湯と向かい合わせにあった「元湯」。元湯温泉組合が運営する市有区営の温泉だったが、老朽化していたため、まちづくり交付金事業の一環で取り壊されポケットパークに生まれ変わった。

ややこしい話だが、この元湯が昔の渋の湯だった。現在の渋の湯は明治28年にでき、当時は「新湯」と呼ばれていた。

というわけで元湯の位置にあった、昔の渋の湯のことなのだが、往時は硫黄泉で白濁し硫化水素の臭気がしていたというのだから不思議だ。



渋の湯と熱の湯の両温泉について古い資料を見ると、明治 19 年「日本鉱泉誌」は「渋ノ湯一名生き湯 熱ノ湯 泉質 渋ノ湯酸性泉、熱ノ湯塩類泉」と渋の湯が酸性泉、熱の湯が塩類泉と説明している。

明治 27 年「別府温泉紀事」は「鉄輪に、渋の湯、熱の湯あり、鶴見に明礬湯あり」とごく簡単な紹介。

明治 29 年「南豊温泉記」の記述はかなり詳しく、「渋の湯 本泉は塩類性硫黄泉なり其性状は白濁色不透明にして盛んに硫化水素の臭気を放つものあり 医治効用は田の湯に同じ 俗間伝称の効能は軽微黴毒、疥癬遺毒を發表し、浴するに従ひ、漸々治癒すと云ふ」「熱の湯 本泉は炭酸性単純泉にして其性状は無色浄澄臭気なく且清涼の味を含み質楠湯と同じ 医治効用亦同泉と同じ」とある。

この頃の渋の湯の「硫黄泉」「白濁不透明」「硫化水素の臭気」といった特徴を見ると、現在の明礬の温泉を思わせる。また田の湯温泉も同じ泉質だったというのだから面白い。なお、年代的には新湯も登場しているはずだが、同書では全く触れてはいない。(続く)

※元湯は 06 年 5 月をもって閉鎖された。 2010 年 7 月 26 日 (月)

## No1018 鉄輪物語

### 明治 28 年新築の新湯 泉質は渋の湯と同じ硫黄泉



繰り返しになるが、渋の湯の向かい側に数年前まであった元湯が、昔の渋の湯(現在の渋の湯は明治 28 年開設で、当時は新湯と呼ばれていた)。ということで、その元湯の位置にあった昔の渋の湯のことだが、前回ひもといいた古い資料では、硫黄泉で白濁していたという。

さらに昔の資料を元に、渋の湯がどう記されているか続けて見てみると(熱の湯については別に詳述する機会が設けるので割愛する)、明治 31 年「豊後温泉案内」は、前回の「南豊温泉記」(明治 29 年)とほぼ変わらない内容。ただし「南豊…」では医治効用の共通する温泉を「田の湯」としていたのに対し、「堀田の湯」と同じだとしている(おそらく書き誤りと判断したのだろう)。文面は次の通り。

「(イ)渋の湯、本泉は塩類性硫黄泉なり其性状は白濁不透明にして盛んに硫化水素の臭気を放つ 医治効用堀田の湯に同じ／◎俗間伝称の効能 軽微梅毒、疥癬、遺毒を發表し浴するに従ひ漸次治癒すと云ふ」

◇ ◇ ◇

次に、明治 35 年「新撰豊後温泉誌」から渋の湯の説明部分をピックアップすると下記の通りだが、腫れ物を治すには渋の湯で病根を表に出させ、そのあと明礬の温泉に浸かれば根治するという組み合わせ入浴の提案は目新しい。

「渋の湯一名生き湯(寒暖晴雨に因て泉色を変す故に土人此名を称す)浴場二槽あり(中略)腫物悪瘡の類は初め此湯に浴し病根を發表せしめ後明礬の湯に入浴すれば根治すといふ／泉質渋の湯は塩類性硫黄泉温度四十六度五分微黄色不透明にして味酸鹹なり盛んに硫化水素の臭気を放つ(中略)本泉は溜飲胃病総て脾胃の弱き人は服用す可らず／医治効用 梅毒、鉛汞中毒、節及関節痺麻質斯、婦人生殖器諸病、膿疱疹、癢疹鱗屑疹等に

適応す」

◇ ◇ ◇

同じ明治 35 年の「大分県案内」には、新湯についての記述があり、明治 28 年新築で最もきれいな浴場だと書いてある。泉質は渋の湯も新湯も同じ塩類性硫黄泉だったようだ。渋の湯のほうの医治効用は「上の田湯」と同じとしているが、これは田の湯温泉のこと。

「渋の湯、熱の湯、蒸湯、新湯等あり往古より世に知られたる温泉にして(中略)新湯は去る二十八年中の新築に係り最も清浄なり」「新湯 泉質 塩類性硫黄泉(中略)医治効用 神経機能の亢進、婦人生殖器の慢性病、貧血症、重病後の恢復期、腺病、疝痛、頑癬、軽症梅毒、痛風、瘰癧に適応す」  
「渋の湯 泉質 同前(中略)医治効用 上の田湯に同じ」。(続く) 2010 年 7 月 27 日(火)

## No1019 鉄輪物語

なぜか書かれぬ滝湯 明治 35 年の解説文付属の「蒸し湯」もあった



鉄輪の代表的な温泉のうち、主として渋の湯について古い資料をひもとき、どう記されているか探ってきているが、今回はちょっとだけ滝湯のほうへ寄り道することをご了承いただきたい。

しばらく前に紹介した明治 21 年の鉄輪の案内書(「鉄輪蒸窖及両温泉分析並医治効用」)には、蒸窖(むし湯のこと)、渋の湯、熱の湯のほかに滝湯(「七ツ瀑」、瀑はたきと読むようだ)も紹介されていた。むし湯、滝湯、渋の湯、熱の湯の順番に一巡り入浴するという“モデルコース”まで書かれていた。

ところが、不思議なことに前回、前々回と見てきたいいくつかの案内書には滝湯のことは出てこなかった。

◇ ◇ ◇

萬屋旅館の項で部分的に披露したが、明治 35 年発行の鉄輪全景の鳥瞰図というものがあり、その裏面には「鉄輪明礬温泉案内」と題した解説文が印刷されている。

温泉について「鉄輪温泉は四大湯あり」として、「渋の湯」「熱の湯」「蒸の湯」「新湯」を説明し、あわせて「七ツ瀧」の解説もあって、次のように記されている。

「七ツ瀧は、流行目、逆上目、頭痛、眩暈、肩腰の痛みを治す 其他蒸窖等の備ありて万事完全せる処なり」

滝湯の効能の説明に加え、「其他蒸窖等の備ありて」と書いていて、つまり蒸し湯(蒸窖)の設備も同時にあったことがわかる。(続く)

◇ ◇ ◇

※掲載した滝湯の絵葉書は明治 45 年 7 月 20 日に実際に差し出されたもの。ということで、撮影されている情景は少なくともそれより以前であることがわかる。 2010 年 7 月 28 日(水)

## No1020 鉄輪物語

誤記で歴史が変わった!? 明治 28 年開設の浴場は新湯のはずが熱の湯に



何度も繰り返すが渋の湯はもともと元湯の位置にあり、現在地には明治 28 年に建てられた(当時は新湯と呼ばれた)。ところが、いつのまにか、案内書では明治 28 年に熱の湯が開設されたという、とんでもない誤りが一人歩きするようになったという話を、今回は紹介したい。



昔の鉄輪の主な温泉施設はむし湯をはじめ、渋の湯、熱の湯、滝湯で、いずれも一遍上人によって造られたとされ、はるか以前から存在していた。

新湯が明治 28 年にできたことを明記しているのは次の 4 冊の案内書で、「新湯は去る二十八年中の新築」(明治 35 年「大分県案内」、同 40 年「豊後温泉誌」)、「新湯は彼の日清役(※日清戦争のこと)当時即ち明治二十八年の新設」(同 41 年「鉄輪みやげ」)、「『新湯』は彼の日清役当時、即ち明治二十七八年の新設」(同 43 年「新撰南豊温泉記」)となっている。



ところが明治 42 年「別府温泉誌」では、これを熱の湯のこととし、「○熱ノ湯 は明治二十八年中、海地獄の温泉を引きて新たに開設したる泉場なり」と書いている。(ちなみに新湯についての記述はない)

この「別府温泉誌」をきっかけに、「熱の湯＝明治 28 年開設」の誤った説が流布していくさまを見ると、次の通り。

「熱の湯は、明治二十八年海地獄の熱湯を引いて造ったのである」(大正 4 年「通俗別府温泉案内」)、「熱の湯＝明治二十八年海地獄より温泉を引きて開設したるものなり」(同年「別府温泉」)、「熱の湯—明治二十八年海地獄より温泉を引いて開設したるもの」(同 6 年「泉都別府温泉案内」)、「熱の湯明治二十八年、海地獄から熱泉を引いて開設」(同 13 年「最新別府案内」)。

おそらく、「別府温泉誌」は校正ミスだったのだろうが、後の案内書の執筆者から次々と引用されていき、鉄輪の歴史が書き誤られてしまったわけだ。(続く)

2010 年 7 月 29 日 (木)

## No1021 鉄輪物語

明治 42 年の 3 温泉施設

明治 28 年にできた新しい渋の湯滝湯とセットで人気呼ぶ



渋の湯はかつては向かい側の元湯(現在はポケットパークに変わっている)の位置にあり、明治 28 年に現在の場所に新築されたこと(当時は新湯と呼ばれた)。この明治 28 年という年号が、明治 42 年「別府温泉誌」の誤記をきっかけに、大正時代の案内書では熱の湯の開設時期と誤り伝えられたこと。滝湯のことが案内書ではあまり紹介されてい

い意外さ、などを書き連ねてきた。



あらためて振り返ってみると、おそらく最初の鉄輪の案内書である明治 21 年「鉄輪蒸窖及両温泉分析並医治効用」ではむし湯に入ったあと、滝湯（七ツ瀑、ななつたき）でのぼせをしずめ、さらに渋の湯（新湯ができる前）、熱の湯の順に入るモデルコースを紹介しているほど、その頃はこの4つが主な温泉施設だった。



滝湯は今でも渋の湯裏にその痕跡があるが、明治 28 年の新湯はその滝湯前に建てられた。むし湯も備えられていて、広い浴槽もあったので、きっと人気を呼んだことだろう。新しい渋の湯（新湯）が確固たる地位を占め、それ以前の渋の湯はあまり表に出る存在ではなくなってきたことと想像される。（続く）



※最初は新湯と呼ばれた新しい渋の湯がクローズアップされ、渋の湯というこの新湯のことを指すようになっていったのは事実。そうすると、時間がたつにつれ新湯という言葉は姿を消すはずなのだが、昭和になってからの温泉案内でも「新湯」という言葉が出てきたり、あるいは出てこなかったりと一貫していない。どうにも整理が難しい。



※掲載したのは明治 42 年「別府温泉繁昌記」掲載の渋の湯（新湯）、熱の湯、滝湯。熱の湯は裏側から見た様子。渋の湯の写真は極めて不鮮明だが、永福寺境内から温泉の屋根を見下ろすように撮影している。

滝湯の写真で、付属のむし湯の入口は画面やや右側手前にあった。画面上部に太い梁がシルエットで写っているが、手前が渋の湯の湯船だった。

2010 年 7 月 30 日（金）

## No1022 鉄輪物語

むし湯と砂湯まで

“新の湯”とも呼ばれた渋の湯



明治 28 年に新築され新湯と呼ばれた渋の湯のことだが、ありがたいことに永福寺の河野智善先代住職が病床で認めた「鉄輪小記」の中に、古老への聞き取りを元に書いた見取り図が出てくる。

掲載した図を見ると、手前が入口で、右が男湯、左が女湯。湯船だけでなく、砂湯があったこともわかる。

奥のほうは、「瀧」と簡単に書いているだけだが滝湯があり、右側にむし湯があった。「新蒸湯」と「新」の文字をつけているのは、一遍上人が造ったとされるむし湯に対しての言葉遣い。左手には洗い場もあったようだ。



一方、掲載した絵葉書は大正時代と思われる渋の湯の立派な外観と滝湯を紹介したもの。「新の湯」（しんのゆ）という呼び方があ



ったこともわかる。流川通りにあった「七福はり」の広告を書いたベンチも見える。(続く)



※明治 38 年の温泉調査「別府浜脇町鉱泉に関する取調書類」の温泉脈の概説の中で、鉄輪温泉脈の温泉として「鉄輪渋の湯新湯／塩類性硫黄泉」「鉄輪熱の湯／含炭酸泉」が書かれている。「渋の湯新湯」という表現をしている。 2010 年 7 月 31 日 (土)

## No1023 鉄輪物語

これが渋の湯の浴場風景 浅い寝湯 奥の戸の外に滝湯



何度も繰り返すが、もともと向かい側の元湯の位置にあった渋の湯は、明治 28 年に現在地に新築された(新湯と呼ばれた)。滝湯にむし湯、砂湯まで備わっていた。

今回掲載したのは、その渋の湯の浴場内部が写った大正期と思われる絵葉書。

画面右側は広い湯船だったようで、柱の横でこちらを振り向く若い男性は、その湯船の縁に腰を下ろしている。画面左側は浅い寝湯の湯船だったようで、手前に老人が横になっているのがわかる。湯船に渡した木に首をのせて枕にし、湯船のへりに足を上げてあお向けに寝ている。砂湯もあるはずだが、老人よりもさらに左側にあったのだろうか。

興味深いのは、別に掲載した画面奥の戸の外側をクローズアップした画像。ぼんやりとはあるが、滝湯を浴びている女性らが写っている。また右の壁面(内部がむし湯)から顔を覗かせている人がいるようにも見える。



こういった具合に渋の湯には滝湯、むし湯などが完備されていたことは、大正時代までの案内書などではなぜか触れていないようだ。

かなり下って、昭和 17 年 4 月 5 日に別府市役所観光課が発行した「別府の代表温泉」では、鉄輪むし湯、渋の湯、熱の湯の 3 施設を紹介。その中で渋の湯について「市有市営／食塩及土類含有炭酸鉄泉で砂湯や瀧湯があります。虚弱者、病後、神経衰弱、内分泌病、諸疾患によろしい。入浴無料」と書かれていて、砂湯、滝湯があったことがわかる。

昭和 10 年代に鉄輪旅館組合が発行した案内には蒸湯、渋の湯、新湯、熱の湯の説明があり、「渋の湯 設備特色 男女両浴室とも泉浴の外に蒸湯砂湯二個、別に五條の大湯瀧をも併設してあります このお湯は含鉄酸性泉にして皮膚病、筋疾に特効、其他諸病に効あり」と蒸湯、砂湯、滝湯(五條の大湯瀧)があることも明記されている。ただし、それとは別に「新湯」の説明(「新湯 このお湯は塩類性硫黄泉にして筋疾、婦人生殖器諸病に卓効であります。」)も記されていることには混乱させられる。(続く) 2010 年 8 月 2 日 (月)



## No1024 鉄輪物語

## 1日607人が入浴 戦前の市勢要覧に見る渋の湯“上渋の湯”の名前も



向かい合って建つ両温泉(渋の湯、元湯)は上渋の湯、下渋の湯とも呼ばれた。

昭和10年9月に朝日村などが別府市と合併して最初に発行された、昭和11年版の別府市勢要覧を見ると、「上渋湯」(渋の湯のこと)の1日入浴者数(7歳以下の子供を除く)は607人に上り、かなり賑わっていたようだ。

また温泉紹介では、「鉄輪むし湯」「渋ノ湯」「熱ノ湯」の3施設をあげ、「渋ノ湯」については泉質、設備、効用を「土類含有塩泉含鉄酸性泉／泉浴、砂湯、瀧湯／慢性胃腸加答兒(※注 胃腸カタルのこと)、神経痛、貧血、神経衰弱等」と記している。

それにしても、同じ資料の中で「上渋湯」と「渋ノ湯」と違う表記が出てきて、とまどわされる。

昭和14年版を見てみると、「上渋湯」の1日入浴者数は若干少ない514人で、年間入浴者数は26万2800人。

同様に3施設をも紹介しているが、「渋ノ湯」は「土類含有食塩泉(含鉄酸性泉)／泉浴、砂湯、瀧湯、蒸湯／虚弱者、病後恢復期、ロイマチス、神経痛、慢性胃腸カタル、貧血腺機能性、神経衰弱等」となっていて、蒸湯の有無をはじめ、泉質や効用に少し食い違いがある。



◇ ◇ ◇

ついでに戦後の昭和26年版をめぐってみると、渋の湯の入浴者数統計はないが、同様に「鉄輪蒸湯」「渋ノ湯」「熱ノ湯」が紹介されており、「渋ノ湯」は「土類含有食塩泉(含鉄酸性泉)／泉浴、砂湯、瀧湯／虚弱者、病後恢復期、ロイマチス、神経痛、慢性胃腸カタル、貧血性機能性神経系諸病等」と説明があり、蒸湯の設備はなかったようだ。効用の表現もちょっと違っている。(続く)

◇ ◇ ◇

※安部巖著「別府温泉湯治場大事典」(昭和62年)の「下渋の湯温泉」の項に、「元湯とも呼ばれる」とあり、昭和11年の「別府市市設温泉規程」に「上渋ノ湯温泉・下渋ノ湯温泉」が書かれていることを紹介している。上渋ノ湯が渋の湯、下渋ノ湯が元湯。 2010年8月3日(火)

## No1025 鉄輪物語

### 署名活動で残った元湯 昭和41年に改築もなったが



今回は戦後の元湯の話。(ずっと渋の湯をテーマに話を進めてきたが、まだ疑問なことが多く、現時点では渋の湯の歴史をすっきりとまとめることができない。ひとまず話題を変えることをご了解いただきたい)

◇ ◇ ◇

このほど5カ年の事業が終わったまちづくり交付金事業。その中で元湯は廃止され、ポケットパークに変わってしまったが、掲載したのは昭和41年10月3日の落成記念の写真。



永福寺所蔵の写真だが、河野智善前住職(後列右

から6人目)の右側には荒金啓治市長、左側には原良三組合長(旅館筑新)が写っている。

元湯と安楽屋(画面左側の建物)との間、画面奥に写っているのは一昔前のむし湯。



ところで、温泉閣の河野忠之さんによると、かつて市が元湯を廃止することを決めたことがあった。署名活動が実り、廃止を免れたというできごとがあったようだ。「市が元湯を壊すといった時におやじ(河野茂さん=写真では後列左から6人目で、ポロシャツを着て手を組んでいる人)が朝日じゅうの署名を集めた」という。

署名運動の趣意書を見ると、「先日、市温泉委員会に於て上渋湯温泉改築案審議の際、下渋湯温泉(元湯)を廃湯する事に内定したことは一昨二十五日集会の席上御説明の通りであります若し此の立案が本会議に於て成立した暁には地元市民並に浴客の不便は勿論、鉄輪地区の衰弊を来す事は明白であり…」とあって、渋の湯改築(昭和 33 年3月)の少し前のことだったようだ。(続く)

2010 年 8 月 4 日 (水)

## No1026 鉄輪物語

### 重たい松の板上げて掃除 元湯の思い出男女区別なかった子供の頃



温泉閣の河野忠之さん(68)が子供の頃というと戦後まもない時期だが、元湯は入口こそ男女別々だが、湯船は同じだった。そのうち男女の区別がうるさく言われるようになり、浴場が仕切られたが、それでも湯船の下は行ったり来たりできた。

湯船の掃除についても、子供の頃、重たい松の板を大人たちが共同作業で持ち上げていた覚えがあるという。

現在と違って昔の湯船は底に松の板を敷き詰めてあり、湯垢は板と板の隙間から下に落ちてたまる仕組み。湯船の清掃は、この重たい松の木をはずして、底にたまったヘドロのような垢を掃除していたという。

朝日村の温泉規程では 10 日に一度掃除をしていたらしく、この湯は1のつく日、こっちの温泉は3のつく日などと決まっていた。(続く)



※明治 44 年 3 月 13 日議決の「朝日村鉄輪温泉場取締規程」では、毎月 3 回以上各温泉の「汲み替え」をすることになっていた。これがそういった浴槽の底の板を除けて掃除をするという意味と思われる。それによると、「一、各温泉場湯坪ハ左ノ日割ニ入浴者ニ不便ヲ与ヘサル様毎月三回以上必ス汲ミ替ヲ為ス事」とあり、日にちの設定を「一、新湯(※明治 28 年にできた新しい渋の湯)毎月一ノ日 渋湯(※のちの元湯のこと)毎月三ノ日、風呂場浴槽全四ノ日 熱湯全五ノ日 地獄原湯全七ノ日」となっている。(永福寺の河野智善前住職の「鉄輪小記」より)

2010 年 8 月 5 日 (木)



## No1027 鉄輪物語

昔は2階に役場もあった 元湯朝日村になる明治 22 年以前



元湯のことだが、ずっと昔は2階建てで、明治 22 年に朝日村以前は役場として使われていたらしい。

永福寺の前住職が記した「鉄輪小記」に、古老に聞いた話として「現在の元湯温泉は以前は下の渋の湯と云って居り二階建てであった由、朝日村となるまで二階を南北、両鉄輪の役場として業務を執行して居た」と書かれている。

ちなみに江戸時代からあった南鉄輪村、北鉄輪村は明治8年に合併して鉄輪村となり、さらに明治 22 年に鶴見村と合併して朝日村となっている。おそらく朝日村以前の役場があったという意味と思われる。(続く)



※前回掲載した昔の元湯の2通りの絵だが、昭和 41 年改築以前の様子は第一図のほうと符合する。第二図はさらにそれ以前の様子なのだろうが、説明などは記されていないためはっきりとはしない。

※読者にはすでにおわかりのように、渋の湯をはじめ温泉の歴史について手元の資料をいろいろと探してみるが、なかなか記録が見つからないため、この連載でも右往左往していて、読者には大変ご迷惑をかけている。あらためて、お願いだが、さまざまな資料、写真、情報をお持ちの方は今日新聞(電話 245171)までご一報いただきたい。

2010 年 8 月 6 日 (金)

## No1028 鉄輪物語



杵築中生徒が徒歩旅行 明治 38 年鉄輪方面修学旅行熱の湯の立派さに感嘆

今から1世紀以上も昔の明治 38 年 11 月 10 日—11 日、鉄輪へ修学旅行に来た杵築中学校生徒の作文という珍しい資料が残されている(県立図書館蔵)。修学旅行と言っても、杵築から鉄輪の宿まで往復をすべて歩く一泊二日の徒歩旅行だった。

とりあえず、鉄輪に到着してからの話題をピックアップすると、旅館に着いてさっそく熱の湯に入浴したようだ。

——皆道具を置き湯場に行った 美し事と云ったら目も醒むる計りである 又其上に広くある。——

「目も覚めるほど美しい」と熱の湯の立派さをほめているわけだが、もしかして新築まもない頃だったのだろうか。

——上って、宿に帰れば、くたびれて居たのも、いつしかぬけはてた 色々の事をして居ると御飯が出来たので飯を食ひ散歩に行った、其して帰へった八時迄夜行を許されたけれど別に行く所もないので皆宿に帰へて来た、も一日は暮れはてて燈火をつけて皆各々輪つくて羅漢廻し或ひは雷り遊び等して居る(中略)そ—こ—して居る内に八時になったので皆床に着いた 昼のつかれか皆前後覚えぬ初旅の夢を結んだのである——



食事のあとに散歩に出て、午後8時まで外出が許可されていたが、「行く所もないので」みな帰ってきたというわけだ。夜、生徒たちが輪

## No1029 鉄輪物語

### 海・坊主など3地獄を見物 明治38年鉄輪方面修学旅行直前に梨本宮殿下ご遊覧



明治38年11月10、11日の杵築中學生徒による鉄輪方面修学旅行の作文を紹介しているが、その行程は杵築の錦江橋に集合し、巨大ソテツで有名な日出の松屋寺を見物し、豊岡、亀川を通過して、県立農学校(現在の照波園町にあった)見学のあと、鉄輪では坊主地獄、海地獄、さらに2日目は柴石と血の池地獄見物をして帰るというものだった。

当時の坊主地獄、海地獄ともにまだ本格的には開発されておらず、現在に比べればごんまりしたものだったと想像されるが、何より生徒たちの印象に残ったのは、梨本宮殿下の御遊覧が直前の11月7日にあったことだったようで、「両地獄共二十一月七日恐大くも(おそれおおくも)梨本の宮殿下遊覧ノあり 我等も本日御(※誤字か)に見る事を得たるは実に快事なり」とその感激を綴っている。

もちろん大地のエネルギーを目の当たりにして「実に言にもつくしにくきほどの壮かん(壮観)なりき」と書いたり、「か山(火山)のふんか(噴火)するも此のよ一にしてふんかするならんと思ひたり」と綴った生徒もいる。



帰路、立ち寄った血の池地獄では、別にあつた青地獄のことも記しているのが興味深い。「血池じごくと青じごくを見たるが血池じごくは大層な勢で一間ほど水が飛上っていた 青じごくはふかく青くあつた」、「かたはらの(傍らの)青の地獄は二三日死んだと云って吹き上がって居らない。誠に残念な事である」などと書いていて、血の池地獄の一面にあつた青地獄はこのころに湧き出るのが終わったようだ。(続く) 2010年8月11日(水)

## No1030 鉄輪物語

### 石垣の農学校も見学 鉄輪方面修学旅行8月移転直後 壮麗さに驚き



のち大正7  
——今年四



かつて県立農学校が現在の照波園町の位置にあつたが、修学旅行団は初日に見学を訪れている。もともと臼杵にあつて、同じ年(明治38年)の8月に石垣に移転したばかり。生徒たちは建築まもない建物の壮麗さにとても驚いたようだ。年6月に三重町に移転しているが、その13年間に農科、水産科、獣医科あわせて726人の卒業生を出している。

月臼杵より移されたのである。本校には農科、水産科、医科の三科が置かれてある。其講堂は実に壯麗を極めて居る。(中略)又本校南側に豚を飼養する所がある。(中略)やがて十二時になったので寄宿生の食堂で飯を食べた。茶などくれて至極丁寧に親切に我等を取りもってくれた。



其れから一時間程よかつて(休んで)実習を見た。其の前に或る一先生が農具について説明して聞せられた。実習は稲

こぎ、大豆じの一、排水工事等であった。中々見事であった。——

他の生徒も次のように建物の立派さを記している。

——この学校は近頃立た物なり 其大なる事 其美なる事 かねそなはりてをった——

——農学校に行き付て見ると家(校舎のこと)は美しくして我等は見た事なかりしかばをどどきた(驚いた)。家の中にはいりて種種の器かい(機械)や業しつ(教室のことか)又馬や動物のこつを見て食堂にて昼飯を食ひ湯をのみ……——(続く)

◇ ◇ ◇

※掲載した写真は明治 40 年の写真集「大分県写真帖」に掲載されたもの。手前の養魚池と思われる池の向こうに立派な2階建ての校舎が見える。

2010 年 8 月 12 日 (木)

## No1031 鉄輪物語

### 愉快で利益あった旅 鉄輪方面修学旅行夕食時“品行悪い”と反省



旅行では思わぬ事故も起きた。生徒の一人が夜中に便所に行き、帰りに縁側から落ちてけがをしてしまった。どの生徒もこのことを書きとどめている。

——夜も明けぬ午前四時の頃思ひがけもなく(中略)便所より帰へりに庭におちてけがをした 誠に気の毒な事であった——

——不幸にも〇〇君は過って下へ落ちた そして少しいたみが出きた 悲しき事である——

作文の終わりは、まとめの感想を記して締めくくることがおきまりだが、「修学旅行はゆかいにして面白くして又利益のなる者なり」、あるいは「旅行は大に愉快で楽しみで今度は二度来るを願ひ待つ 又大なる利益のある者である」などと書いていて、当時は“愉快”や“利益”という言葉をよく使ったようだ。

修身の授業の影響と思われるが、品行の善悪という言葉を使つての反省の言葉も目立つ。「善はなかった 悪は品行の事がわかつた」と非常に厳しい総括をしている生徒もいて、その理由は「夕御飯を食ひ時品行が悪かつた」ということらしく、旅館での夕食時によほどはしゃいだりして行儀が悪かつたものと思われる。

「夕飯を食ひ其の時は至極さはがしくあつたが夜いねて朝出るまでは極静かでかへって大に宿の人よりほめられた」と書いた生徒もいる。夕食時は悪かつたが、そのあとは静かで宿の人からほめられるほどだったというわけだ。



なお帰り道に他校生とけんかもした生徒もいて、「日出高等小学校にて弁当を食ひ日出高等とけんかをなす」という下りも出てくる。(続く)

◇ ◇ ◇

※宿泊した旅館は富士屋と書かれているが、現在のむし湯の位置に存在した昔の富士屋旅館と思われる。

○鉄輪物語はさらに続きますが、次回からしばらくの間、別の話題を取り上げます。ご了承下さい。

2010年8月13日（金）

## No1032 ～ No1053 別の話題

### No1054 鉄輪物語

#### 熱の湯前に豪壮な3階建て 大平屋旅館佐藤倉八が明治末に開業



市営熱の湯前の広い駐車場にあったのが、大平屋旅館。故佐藤文生郵相の生家としても知られる、鉄輪の老舗旅館だった。

佐藤家はもともと酒造業だったが、明治末に旅館を始め、ほどなく大正3年に立派な3階建てにした。

大正6年「大分県人名辞書」によると、工費3万数千円を投じて建築。設備もサービスもよく、鉄輪の高等旅館として異彩を放っており、ぜひ泊ってみるべきだと勧めている。



旅館を始めたのは佐藤倉八(昭和46年没、享年81歳)がまだ若い頃。熱の湯と向かい合わせの立地条件のよさもあって繁盛した。倉八は事業欲が旺盛で温泉染めのタオル会社もしたほか、鉄輪の旅館組合長や朝日村の村会議員として活躍した。ハイカラで芸事も好きで、男前だった。戦前、高等小学校の同級生近幸雄氏(別府市議、浜脇)が書いた回想文によると、子供の頃の倉八は女性のように美しい美男子で、歌声も美しかった

という。(続く)



※大正6年「大分県人名辞書」の記述は次のとおり。「佐藤倉八(速見郡朝日村)鉄輪温泉旅館『大平屋』主人也。明治二十三年生る。家素と酒造、質業を兼営せしが、土地の発展に囑目して四十四年旅館業を創め、顧客雲集、業務大に振ひ、大正三年工費三万数千金を投じ大廈三層楼を建築するの盛運を開拓す。設備に待遇に、遺憾なく、同地に於ける高等旅館として劃然異彩を放てり。鉄輪に遊ぶもの一泊を試むべき也。」



※倉八は明治37年3月に別府高等小学校(当時は別府・浜脇・石垣の2町1村の組合立で、朝日村から通学する者もいた。現在の青山小学校東側にあった陸軍病院の位置)を卒業した。

別府市立北小学校「創立六十周年記念誌」(昭和10年刊)所収の近幸雄氏「思ひ出を語る—同級生諸君に贈る—」で同級生それぞれの思い出を認め

ており、倉八の部分は次の通り。「佐藤倉八君、鉄輪で大平屋旅館を営業堂々たるものだ。往時女のように美しかったが依然美男子におはす唱歌が上手で美しい声を出してゐたが、今は村会議員として村政に尽してゐる。」

※掲載した明治 43 年「新撰南豊温泉記」の広告には「豊後鉄輪温泉場／入湯旅館／大平屋／本館は、鉄輪温泉、熱の湯、直前にあり。客室清潔。空気流通亦宜しく。四時入浴、最適當の位置なり」とある。 2010 年 9 月 9 日（木）

## No1055 鉄輪物語

### 男性を立てる武士の家風 大平屋旅館妻ウメは杵築の興津家から



佐藤倉八の妻ウメ(昭和 61 年没、享年 91 歳)は、杵築から嫁いできた。杵築藩の家老をした名門興津(おきつ)家の出身。

嫁入りの行列は鉄輪から亀川まで続いていたという。身の回りの世話をする下男まで一緒に付いてきた。

次男の文三郎さん(81)＝千代町＝は「嫁入りの時におとこし(男衆)が付いて来た。母の言うことしか聞かなかった。死ぬまでいました」

と  
後



振り返る。ウメは8人兄弟の末っ子で、神戸女学院(現在の神戸女学院大学)に学んだ。同級生に高良とみ(戦

初の女性参議の1人として有名)がいて、ずっと手紙のやりとりをしていた。男兄弟5人はみな東京大学出身の秀

才揃いだった。嫁いだばかりの頃は旅館の客を迎える時に「いらっしやいませ」ではなく、「どーれ」と武家風の言葉が出てしまうこ

とがあつたらしい。男性を立てる家風で、倉八のことを「おかみ」と呼び、女中に「おかみに食事を持って行って」と指示していた。旅館業にもかかわらず、食事は朝6時、正午、夕方6時と決まった時間に、家族と従業員と一緒にとるしきたりだった。(続く)



※ウメの母は城代家老の中根家の出身で、興津家は江戸家老。文三郎さんによると、「城代家老のほうが格が上です」とのこと。興津家は桜田門外の変を目撃したことで知られる。

※文三郎さんと美容師の眞美さん(76)は恋愛結婚。昭和 33 年にオリオン美容室を開いた。眞美さんは義父倉八について「まだ 20 歳そこそこの私を対等に扱ってくれました」と感謝しており、「すごい父と母でした」と語っている。

※掲載写真のうち、興津家の家族の写真(明治 42 年1月5日撮影)は後列左側5人が男兄弟、その前に腰掛ける女性3人がウメ(左)と姉妹。 2010 年 9 月 10 日（金）

## No1056 鉄輪物語

## 可愛がってくれた兄文生大平屋旅館末娘野上喜久代さん芸事に厳しかった父



別府の生んだ大政治家、佐藤文生郵相(平成 12 年没、享年 82 歳)を、「兄にはよく可愛がってもらいました」と懐かしむのは妹の野上喜久代さん(78)＝北浜1丁目、べっぷ野上本館女将＝。

選挙の時には一生懸命に応援した。「今ならファックスだけど、昔は足で稼ぎました。大臣の時は地元で活動できないので、姉(文生夫人)と一緒に回りました」。また「父(倉八)もアイデアマンだけど、兄もアイデアマン。かもめ丸という遊覧船もしました」とも。



両親については、母ウメがやさしかったのに対して、父は厳しかった思い出がある。

「昔は鉄輪にも芸者がいた。私が3、4歳の頃、福岡から藤間流の先生が1週間に一度来て、大広間で芸子さんと一緒に稽古をしてもらったが、父は芸事には厳しかった。昔はホステスというのはいなかったから、宴会の時は芸子さん呼んだものです」。

しかし、そのおかげで幼い頃から稽古に励んだ踊りは、旅館の客に披露して長く喜ばれてきた。



以前は鉄輪も温泉祭りは、シャモジを叩いて派手にやっていた。旅館組合長だった倉八はチャップリンのような仮装をした。

手先が大変器用な人で、「父がこしらえた作りベッドのある部屋があった。私も手伝ったが、壁塗りや電気関係も自分でやっていた。そういうことは旅館には必要なんです。字も上手でした。母も達筆で、父は母の字を気に入って一緒になったとなれそめを聞いたことがあります」という。



大平屋旅館は修学旅行生が多く、みな旅館前の熱の湯に入っていた。熱の湯の横には水を汲む場所もあった。

「部屋は 33 室あった。ほとんどが修学旅行。生徒たちは男女それぞれに熱の湯に入った。熱の湯の横の坪で、水筒に湯を汲んでいました」。

また昔のメイドたちはよく働いたものだった。「メイドさんも 15、16 人いた。朝から晩まで働き者だった。浴衣も縫っていた。障子の張り替えもメイドがした」。



昔のメイドさんは田舎の方から花嫁修業のために来ていました」と振り返っている。(続く)



※掲載した家族の写真は、前列が出征する長男文生をはさんで父倉八と母ウメ。後列の兄弟4人はみな健在で、左から久留米の木下病院に嫁いだ千鶴羽、喜久代、文三郎、荒金啓治元別府市長の長男に嫁いだ多鶴江。 2010 年 9 月 11 日(土)

## No1057 鉄輪物語

眺望はなはだ快闊なり 大平屋旅館大正4年泊まった新聞記者



めて紹介し  
遅塚の文

ひろみや	中野屋	常盤屋
大平屋	大平屋	大平屋
大平屋	大平屋	大平屋
大平屋	大平屋	大平屋
大平屋	大平屋	大平屋
大平屋	大平屋	大平屋
大平屋	大平屋	大平屋
大平屋	大平屋	大平屋
大平屋	大平屋	大平屋
大平屋	大平屋	大平屋

大平屋の3階からの眺望は素晴らしかった。

別府がまだ全国に広く知られるまでに至っていなかった大正4年7月、東京の各新聞社の記者たちが別府に招かれた。このうち、都新聞の遅塚麗水という人が大平屋に宿泊したことはすでに取り上げたが(08年2月12日、第427回)、あらたたい。

章は「余は大平屋なる洋館の最高楼に宿す、前に実相寺山の積翠を看、平蕪直に別府湾に接し、眺望太だ快闊なり」。大



平屋の3階から緑豊かな実相寺が見え、草原がそのまま別府湾につながっている様子も見え、とても眺めがよいとほめているわけだ。

旅館前の熱の湯へ入湯したことも、「何はさて館前の浴場に飛び込む、温泉の明浄なる、日に焦げし余が四肢は象牙とばかり白く透けたり。」と書いていて、当時はとても透明度の高い温泉だったようだ。

大平屋は大正3年に3階建てにしたばかりで、遅塚が宿泊した頃は真新しい施設だったわけだ。



※遅塚麗水の文章は大正4年12月発行の案内書「別府温泉」に掲載されたもの。

※大平屋の開業日は、すでに紹介した大正6年「大分県人名辞書」では、明治44年創業で、大正3年に3階建てにしたということだったが、明治41年4月11日発行の案内書「鉄輪みやげ」にすでに広告が掲載されており、もっと早かったことがわかる。大正12年「豊後温泉地旅館名簿」では開業日を明治41年5月4日としており、明治41年が開業年であると考えてよさそうだ。

※各旅館の宿泊者数を示す古い資料「鉄輪温泉使用料徴収人員各月宿屋別表」は、大正2年度のものが残されており、大平屋の宿泊者は同年10月から翌3年3月まで空欄になっている。3階建ての建物を建設中で営業できなかったことを示している。



※今回掲載したうち、大平屋からの眺望を示す写真は雪が降った日に撮影したもので、屋根に白く雪が積もっている。藁葺き屋根の家もまだいくつも見える。撮影年は不明だが、大正終わり頃だろうか。 2010年9月13日(月)

## No1058 鉄輪物語

明治期佐藤庄屋が開業      みなとや旅館昭和14年江野尻家が後継ぐ



洪の湯の北側にそびえる、鉄筋コンクリート造り4階建てのみなとや旅館(江野尻明さん経営)は明治以来の歴史を持つ。もともと庄屋の佐藤家が営んでいたが、山口県岩国市の江野尻家が買い取って、昭和14年12月19日に開業した。

明さん(58)や姉の伊東アサ子さん(66)=双葉荘女将=によると、宇部興産の社員だった父江野尻博はぜんそくの持病があり、転地

療養のために鉄輪に来た。祖母のシナが息子博のためにと買い取った。

博は故郷の岩国同様に山と海がある別府が気に入り、発作が出ない時は山にキノコ狩りに行ったり、猟銃を持って狩りをしたり、海で魚を捕ったりしていた。しっかり者のキクエが女将として旅館を切り盛りした。

毎年 12 月 19 日は開業の記念日として、従業員と家族がすき焼きなどのご馳走を囲むのが恒例だった。

◇ ◇ ◇

洪の湯北側にある永福寺への参道と、旅館敷地を仕切るブロック塀は以前はなく、南向きの木造3階建て旅館には参道側から直接出入りができた。昔風の旅館らしく、階段がとても急だった。

この建物のほかに、西側にあった古い2階建ては昭和 30 年頃に岩国に持っている山から材木を切り出して木造3階建てに建て替えたほか、裏手には昭和 36 年頃に鉄筋コンクリート造り4階建ての新館も建てた。(続く)

◇ ◇ ◇

※大正 12 年「豊後温泉地旅館名簿」では、港屋の創業は明治 27 年4月 12 日、電話番号 34 番、経営者が佐藤シヲリとなっている。

※「鉄輪温泉使用料徴収人員各月宿屋別表」では経営者名が、大正2年、12年、昭和3、4年の各年度は佐藤シヲリ、昭和6、7年度は佐藤秀雄となっている。

※戦前の旅館名簿では、昭和 12 年現在では室数 22、畳数132。昭和 15 年現在では室数 17、収容人数が 56 人となっている。

※今回掲載したうち、旅館の玄関前の写真では画面奥に「かしま」の看板も見え、当時は旅館のほか貸間もしていたことがわかる。着物姿の少女3人はみなとや旅館の姉妹(和子、アサ子、静子)。  
2010年9月14日(火)

## No1059 鉄輪物語

春は続々と修旅生 みなとや旅館地獄巡りやラクテンチへ



ったという。

当時は北九州、福岡、山口方面の小学校の修学旅行が多く、4月の学年始め早々から5月いっぱい集中していた。地獄巡りやラクテンチ、高崎山のサル見物をし、志高湖や十文字原からの景色を見て帰っていた。弁当屋ができる前は、昼食のおにぎりを用意するのに旅館はてんでこ舞いだった。何軒かの旅館で分宿で受け入れていた。博さんや姉のアサ子さんは子供の頃、「一緒に行こう」と誘われ、バスに同乗しラクテンチへ連れて行ってもらった思い出がある。年間 60 校ほどもあった修学旅行だが、平和学習のため長崎を目的地にするようになってからは、来なくな



その後は、大阪な



どからの老人クラブの団体が多くなった。福山通運、宇



部興産、宇部セメント、協和発酵といった会社関係の保養所契約も多かった。山口県の健康保険組合の指定も受けていた。(続  
く)



※昭和 29 年5月発行の鉄輪の宿泊PR小冊子「地獄巡りと山のいで湯／別府鉄輪温泉」(湯けむり社)に、「学生旅行団に最も  
よい鉄輪」という見出しの広告文が掲載されている。参考のため紹介する。

### No1082 鉄輪物語

#### 文人来遊の歴史誇る

富士屋が旅館営業をしていた頃のパ  
掲げて旅館の誇りにしていた。

の古木(県特別保護樹、樹齢200年)

—1959)の「温泉に入るや昼寝覚めたる顔許り」「汗人に一山越えて一温泉あり」。



#### 富士屋昭和 11 年鉄輪描いた日本画も

ンフレットには、かつてここで詠まれた詩歌も掲載し、「文人来遊」とキャッチフレーズにも  
人間国宝の人形作家・歌人の鹿児島寿蔵(1898—1982)が、庭のウスギモクセイ  
を詠んだ「四十餘年見ざりし宿の大木犀けなげに黒く繁りてたてり」、高浜虚子(1874



さらに漢学者綿引東海(1837—1915)の漢詩は、読み下せば「温泉東西につらなり車馬南北に忙し／村の名是れ鉄輪先ず登る芙蓉  
楼(※富士屋のこと)…」と鉄輪や富士屋を詠み込んでいる。



同家には昭和 11 年夏に宿泊した日本画家、小早川秋声(1885—1974)が描いたむし湯風景など4枚の絵が大切に保存されており、  
描かれた湯治風景は記録としても貴重なものとなっている。絵の一部は戦前の鉄輪旅館組合発行パンフの表紙に使われている。



当時の旅館の様子を、幼い頃から富士屋で育った池部道子さん(86)＝掲載写真の中央左側の女の子＝と渡部妙子さん(84)＝同  
右側＝姉妹は、「客筋がよかった。福岡県の京都郡、嘉穂郡あたりのお客さんが多かった」。頭山満(前回写真掲載)が泊まった時は  
「接待をさせられたが、恐かった」(道子さん)。両親の安波勳八・ハナ夫婦がともに早く亡くなったため、姉妹は兄の勲さん＝掲載写真  
の男の子＝と3人で引き取られたが、富士屋の子供として「分け隔て無く育てられた」と今も深く感謝している。なお、掲載写真では妙



子さんの隣にノブ、道子さんの一人おいて左隣りに新屋のフユが写っている。

◇ ◇ ◇

※掲載したのは明治23年の県下の財産家の番付表＝秋吉収さん資料提供＝。大判の表には約3000人の名前があり、最上段には特に大きな活字で横綱、大関、小結、前頭約100人を記している。3代前の安波利一（りいち）＝速見郡、朝日村＝も前頭として登場している。

※現在のむし湯の位置にあった元の富士屋のほうは富士屋本家と名乗っていたことはすでに紹介したが、昭和15年現在の「温泉大鑑」などでは富士屋支店となっていて、この頃から名前を変えたようだ。

---

○鉄輪物語はまだ続きますが、しばらく鉄輪と離れ次回は朝見3丁目の話題を取り上げます。 2010年10月19日（火）

「修学旅行の学生団体は年々増加しつつあるが、あらゆる観点から、鉄輪は最もよい環境に恵まれていると言ふことが、いへる。／と言ふのは、周囲の眺望がよく、空気が清澄で、汚れを知らぬ静けさの中で、安眠と休息が得られ」と書き出し、地獄巡りや内湯・共同湯の入浴の便がよく、風紀がよく安心して外出ができるため、「市中宿泊で、必要以上に気をつかはれる引率先生方の苦労も救はれる訳けである。」と市街地に宿泊するよりも、引率の先生たちの気苦労がないというメリットを強調している。 2010年9月15日（水）

## No1060 鉄輪物語

類焼から立ち上がる みなとや旅館 40年2月10日未明に火の手



昭和40年2月10日未明、平野屋旅館から出火し、両隣りのみなとや、安楽屋も大きな被害を受けた。

一気に火が燃え移ったみなとやは、木造3階建ての建物が全焼して崩れ落ち、半焼とされた裏の新館（鉄筋コンクリート造りの4階建て）も3、4階を中心にほぼ焼けた。



家族たちは逃げるだけで精一杯で、家財道具などを運び出す余裕はなかった。猟銃を扱う江野尻博は、弾の火薬が爆発しては大変と持ち出すのに必死だった。

近所の人たちが駆けつけてくれたり、北鉄輪の人たちが1週間も後かたづけの手伝いに来てくれたりした。火事の跡は1週間もくすぶり続けた。

◇ ◇ ◇



数日後にみなとやが差し出した、類焼見舞いの礼状には、追伸として「館主家内従業員一同(中略)日夜復旧に努力致し居り一応新館内部を改造致し四月一日より営業の見通しがつきまして収容人員大人八十五人、小学生二五〇人、営業の予定」と4月1日から改造した新館での営業再開を告げ、「何れ近い内に旧に倍する復興の覚悟にて従業員一同頑張ります」と旅館再建への決意を記している。

ひとまず焼け残った新館を改造し、3階の大広間を個室に区切って客間を作ったりした。



鉄輪の宿泊客が多い頃で、さっそく金融機関が融資してくれ、焼け跡に鉄筋コンクリート造り4階建ての旅館を再建した。

博は建設には大いに凝り、セメントをたっぷり使ってコンクリートを堅固に仕上げたり、現在は伐採が禁止されている屋久杉を丸太で買い付けして運び、柱や天上板、障子に使った。

新しい建物は東向きで、前に駐車スペースを広く空けた。安楽屋と半分ずつ買い取った平野屋跡を、新たな進入口とした。(続く)



※もともと庄屋の佐藤家が所有していた同旅館には、古文書もかなりあって、学校の先生もした平三が整理していたが、焼失した。

※当時の今日新聞によると、午前3時40分ごろに平野屋旅館3階の6畳客室から出火した。湊屋旅館(みなとや)、安楽屋呉服店を合わせて、計4棟、2000平方メートルを焼き、4時半に鎮火した。「一時は火の粉が散り、近くの商店、旅館は総出で火の粉を払い、大阪から来別していた老人ドック団二百名はごったがえす暗黒の泉郷道路をひしめきあって避難するなど大混雑を生じた」と現場の混雑ぶりを伝えている。



※昭和30、31年ごろのこと、いち早くテレビが入った。何軒かの旅館で一緒に山に鉄塔を建て有線で電波を受け取って、玄関近くの部屋で視聴した。近所の人も大勢集まって見ていた。 2010年9月16日(木)

## No1061 鉄輪物語

湯貴塾で元気に町作り みなとや旅館明さんは初代塾長つとめる



「湯貴(とき)塾」という、鉄輪の若者たちによる元気な町作りグループがかつてあった。みなとやの江野尻明さん(58)は初代塾長としてリーダーをつとめた。

大学進学や会社勤めで10年間鉄輪を離れていたが、父の病気などでやむなく帰郷。帰ってきたものの友達がいなかった。そんな時に、愛耐会会長の原寛孝さんから若手の会を作ったらと勧められたのがきっかけだった。

当時の会員



募集を見ると、入会呼びかけ文には「鉄輪でもすでに国民保養温泉地の指定や鉄輪焼酎の発売などにより、マスコミに

も取り上げられ、九州はもちろん全国的にも注目され、徐々に活性化の道を歩みだしています。動き出した流れの中で私達若者が町を知り、町を考え、町の将来をつくりあげようという趣旨で発足するものです。」とあり、積極的に鉄輪の町作りに関わっていこうというはつらつとした気持ちがみなぎっている。初年度の行事予定を見ると、昭和 60 年6月の発会式から翌年3月まで毎月、鉄輪の歴史や町作りについて勉強会を開いていったようだ。

ネーミングは、鉄輪温泉を開いた一遍上人の時宗(じしゅう)の「時」(とき)から。温泉を尊ぶという意味で「湯貴(とき)」を当て字にした。

明さんによると「松岡実さんを講師に鉄輪の歴史の勉強会をしたり、温泉祭りの時に山車を作り厄年の人を乗せて湯かけもした。「しゃあしい鉄輪」というタイトルでバーベキュー大会もやりました。「ワイワイ市に出店して資金作りをして町作りの視察に行ったり、風倒木をもらってきて案内の看板も立てました」とみなで意欲的に活動していった。子供たちを対象に「ときっ子の会」も作り、小刀を使った工作や扇山登山、みなとやの大広間を使って書き初め大会もして巨大な筆で自由に書かせるなど毎月ユニークな催しを行った。

「初代塾長は私で、2代目がおこしやの本田、3代目が菅野製麺の菅野、あとは園上」。「親父・おふくろたちがまだ頑張ってくれて、何も専務(せんむ)なら何かやろうという感じだったが、自分たちが仕事で忙しくなるとできなくなった。10年間やって終わった」。

鉄輪では5カ年にわたるまちづくり交付金事業が終わったが、その下敷きには湯貴塾などかつての町作りの取り組みがあったと自負している。「今回の町作りがうまくいったのは、その頃やっていた人たちがいたから。自慢をするわけではないが」と話している。



※募集文では、募集対象は町内に住む 20 歳—35 歳までの男女で、「町作りに関心があり、若者のふれあいの中から自己研磨に努めようという意欲のある人」。発起人には 10 人(江野尻明、西村和夫、加藤信治、安波秀男、後藤一雄、本田秀敏、中野志津子、菅野万章、本田光信、安波ひとみ)が名前を連ねている。

2010 年 9 月 17 日 (金)

## No1062 鉄輪物語

### 40 年前の湯あみ祭り 地獄の鬼も出演 湯治客で賑わう



恒例の鉄輪温泉「湯あみ祭り」も今年で 51 回目。永福寺を中心に 21 日から 23 日まで3日間、開催されている。地獄や旅館・ホテルなど温泉や噴気の所有者・利用者が献湯し献湯筒供養が初日にあり、2日目夜は奉納踊り(むし湯広場)、3 遍上人像を渋の湯などで洗い清める湯あみ法要、稚児行列で賑わう。

およそ 40 年ほど前の祭りの一コマをとらえた写真で、時の流れを感じていただこう。(写真は双葉荘提供)



渋の湯前で、向かい側にあった元湯(現在はポケットパークになっている)との間の狭いスペースに地獄の鬼たちが出演していたり、湯



日目が一  
今回は  
◇  
3枚は

あみ法要で一遍上人像を手にする永福寺の河野智善前住職も写っている。いでゆ坂ぞいにあった旅館ときわや前に大勢の見物客がいるのも見える。

撮影年は不明だが、元湯は改築(昭和41年10月)後で、昭和56年に亡くなるまで10年間寝たきりだった智善住職もまだ元気な様子。元湯の改築後数年の間の撮影ということになると思われる。

近くのみなとや旅館の写真では、出演した鬼たちが訪れたのか宿泊客も窓から顔を出しており、面をはずした鬼の一人が従業員と笑顔を交わしている。

◇ ◇ ◇

昭和38年(1963)2月発行「別府温泉史」の「別府の年中行事」の項に、松岡実さん(郷土史家)が当時の湯あみ祭りのことを書いている。半世紀近く前、祭りがまだ始まったばかりの頃は9月21、22日の2日間開かれていたようだ。また真夜中に「初湯」を汲むという行事も行われていた。

——二一日は午後四時からこども相撲、午後八時から昔ながらの盆踊りが催され、二二日は午前〇時からむし湯、渋の湯、熱の湯で初湯をくむ湯くみ法要、また同日午後三時には鉄輪地区の温泉、地獄所有者から奉獻された献湯をまつる献湯会が執行される。さらに午後四時むし湯で入釜法要、熱の湯で飲湯法要が行なわれ、渋の湯では古代にのっとり湯あみ法要が厳修される。一般上人のお行列には稚児行列や「善の綱」の一行がお供につき、法悦に酔う善男善女の数は数百人を突破する。——

2010年9月22日(水)

## No1063 鉄輪物語

“鉄輪の誇り”とはいえ… 大正11年の漫画家たち 暗くて狭いむし湯は敬遠



別府をPRしてもらおうと招待された東京の漫画家たちによる、漫画や紀行文を満載したのが大正11年「温泉案内漫画の別府」という本。

もちろん、漫画家たちは鉄輪も訪れ、主にむし湯を見物した。

細木原青起という漫画家の文章のタイトルは「鉄輪の誇り『蒸風呂』」「その顕著な効能は奉納した松葉杖の数で証明される」。とはいっても、暗くて狭い蒸し湯の中に寝そべる人たちを見て、敬遠する気配がありありと記されている。

——天下の奇観、鉄輪の誇りとする蒸風呂を参観する。(中略)中を窺(のぞ)いて見たがと真っ暗闇と蒸気の為に見得ない。(中略)石枕に体軀を横たへた裸体が二三朦朧として見える。病気の為とは言へ能く忍べるものだと感心する。併し決して息苦しくはない相(そう)だが、斯うなると病身は悲惨だ。

もちろん、たくさん奉納されている松葉杖や、順番待ちの人の長い列を見ると効能があることは証明されているのだが、結局入ってみようという意欲は起こらなかったようだ。

同時に鉄輪の特徴としてあげているのが、ありがたい地獄釜の存在。この町の人には薪や炭がいないため、火の尊さを知らないのではないか、こんな土地はよそにはないと言っている。

——煮炊きは総て噴出の蒸気で事が済む為薪炭は無用の長物。土地の人は恐らく火の尊さを知るまい。／こんな自然は又恐らく日本の他の土地にはあるまい。——  
2010年9月24日(金)

## No1064 石垣村物語 省略

## No1065 鉄輪物語

### 5代続く上富士屋江戸末期に富士屋から分家



新しくなった市営鉄輪むし湯のすぐそばにある旅館上富士屋。もともと富士屋旅館はこのむし湯の位置にあり、その山手で高い位置にあったことから「上富士屋」と呼ばれたらしい。

旅館上富士屋は現在の主人、安波武弘さん(74)で5代目。江戸時代の終わり頃に、富士屋から分家したのではないかと。

初代が亀吉、2代目が長男の桑吉。3代目はその弟で原家の養子になった鎌吉の長男武平が継いだ。武平はわずかの間、朝日小学校の代用教員をしたことがある。同校百年史の歴代職員名簿では明治24年に4カ月ほどの短い間勤務したことがあり、その頃はまだ「原」姓で「原武平」と記録されている。

4代目亀治(武平長男)は朝日村役場につとめ、合併後(昭和10年に別府市などと合併した)は別府市役所に勤務し、岩屋護氏の下で働いていたこともあるという。(続く)



※掲載した明治43年「新撰南豊温泉記」の広告には「豊後鉄輪温泉場 入湯御宿 上ノ富士屋 安波武平」とある。

※天満社の秋祭りの写真では、左端の袴姿の人物のうち前から2段目が安波武平。写っている神輿を購入するため、総代の武平ははるばる京都まで出かけたという。

※宿屋組合の写真では武平は後列右から4人目で、柱のすぐ左に写っている。揃いの浴衣にはかんなわ温泉という文字と、むし湯で恢復した湯治客が不要になった松葉杖を奉納していたことにちなんで松葉杖も描かれている。 2010年9月27日(月)



## No1066 鉄輪物語

### 農業や勤めの傍ら地道に 上富士屋大正2年は1238人宿泊



農業や勤めをする一方で、小規模ながら地道な旅館経営を続けてきたのが上富士屋。の宿泊者数が分かる「鉄輪温泉使用料徴収人員各月宿屋別表」(大正2、12、昭和3、4、6、7年度)



昔の各旅館によると、各





七蔵・フユの子供は7人。長女ハツエ(初枝)は筑後屋の原蘇七の妻で、子供に筑後屋本館の原誠治、同新館の原良三がいる。(本連載の筑後屋の項に掲載)

長男庄八(昭和 24 年没、享年 68 歳)の妻は中野屋出身のジュン(昭和 53 年没、享年 92 歳)。跡継ぎの不二男は惜しくも昭和 20 年ルソン島で戦死し(享年 33 歳)、その後新屋旅館を守ったのが妻静子(平成 15 年没、享年 87 歳)だった。

そのあとは次女テルエ(かつき屋の後藤達吾の妻)、次男勲八(眼科医)、三女アキエ(安楽屋の後藤熊吉の妻)、四女ミエ(日出の笠置家に嫁ぐ)、五女セツ(満洲屋の古屋益の妻)。(続く)



※掲載した安波フユと5人の娘たちの写真は年代を経てかなり痛んでいるが、明治 37、38 年頃の撮影かと思われる貴重なもの。椅子に腰掛けているのがフユ。後列右からテルエ、ハツエ、アキエ。前列左からミエ、セツ。 2010 年 9 月 29 日(水)

## No1068 鉄輪物語

### 日出までワラジで通学 新屋旅館農業改良唱え村議務めた庄八



新屋旅館の安波七蔵・フユの長男庄八は明治 15 年生まれ(昭和 24 年に享年 68 歳で没していることから逆算)。尋常小学校を卒業したあと、高等科がまだ別府になかったため、日出まで毎朝暗いうちからてくてく歩いて通学した。草鞋は自分で編むのだが、履き続けるとすぐに傷んでしまうため、人が見ていない間は裸足で歩き、豊岡あたりに来ると履いたという。とても物知りな人だったようだ。

大正 13 年に出された「速見郡郡政史」には朝日村の村会議員としてプロフィールが記されており、温厚な人柄で、農村振興のためには農事改良が必要だと施設改革を主張したとある。

当時は本家の富士屋との関係が近く、庄八が後見人の役をしていたこともあったらしい。

安波節生さん(70)は孫として庄八に非常に可愛がられた。「牛を飼っていたので、子供の頃、新別府の方に種付けをするのに連れていってもらった」と思い出を語っている。



さて、新屋の安波フユと孫たちの記念写真は昭和5年夏に新屋の仏間で撮影されたもの。フユは古希の祝いだったかもしれない。大勢の孫たちに囲まれ、満ち足りた表情で写っている。





孫たちの中には、3列目では、筑後屋の原誠治(右端)や原良三(1人おいた学生服姿)、新屋の庄八長男の不二男(その左隣り)、2列目では男子の右から4番目に安波医院をした安波勲がいる＝以上はいずれも故人＝。前列右端にはまだ幼い後藤佐吉元市議(88)＝安楽屋＝が姿を見せている。(続く)

◇ ◇ ◇

※大正13年「速見郡政史」の文は次の通り。「朝日村／村会議員 安波庄八氏／為人天資誠至篤にして人と角するなく交るに温情を以て寡言能く情理を解するの人也 世に地名を博したる鉄輪温泉場に寓し宿屋業を営む 氏の本懐は農本意にして農事の改良は汎く農村振興の原泉たるの明識を有し主として其の施設改革を高唱す 氏の温健なる人格は遂に民衆の迎ふる処となり村会議員に推挙せられ自治に参与し革進に努め細心の注意を以て尽瘁せり」

※新屋の電話番号は7番で、早いうちに取得しており、当時有力者であったことを示している。ほかに鉄輪の旅館で一桁は、本家富士屋(安波利三郎)が8番、現在の富士屋ギャラリーにあたる富士屋別荘(安波利夫)が2番、大平屋(佐藤倉八)が3番、辰巳屋(平川信勝)が9番、菅原屋(菅又三郎)が6番。ちなみに海地獄が5番、地獄巡定期乗合自動車の泉都自動車出張待合所(御料理松廼家内)が4番だった。(大正12年「豊後温泉地旅館名簿」による) 2010年9月30日(木)

## No1069 鉄輪物語

### 戦後は教職員組合指定も 新屋旅館熱の湯の通り道で賑わう



「新屋は小さな旅館だったが、戦前の右翼の大物、頭山満が書いた書が飾ってあった。持って行かれた」と安波節生さん(70)＝東京都在住、庄八の長男日出男の長男＝は残念がる。

周辺の賑わいぶりを懐かしく振り返るのは、いここで、結婚するまで新屋で育った奥川瑠美子さん(71)＝大分市在住、庄八の長女キサエの長女＝。

「朝早くから熱の湯に行く人で賑やかだった。子供の頃は(旅館前の)石畳を掃いていた」。今と違って周囲は商店が多く、向かい側にあった煙草屋(池永)や下駄屋(丸山)をはじめ、雑貨屋、パーマ屋、みやげ品店(池西)などが並んでいた。戦後、教職員組合の指定旅館になったため、「夕方になると先生たちがどんどん来ていました」。

◇ ◇ ◇

前回掲載の写真で、安波フユの左隣りに座るあどけないおさな子が古屋幸子さん(82)＝フユの5女セツの次女＝。新屋のすぐ裏手で平成19年まで満寿屋(貸間)を営んでいた。新屋旅館のことを今も詳しく記憶している。

新屋は明治時代からの古い2階建てに、渡り廊下で繋がって3階建ての棟があった。この3階建ては1段下の敷地に建っていたため、見る方向によって

2階建てにも3階建てにも見えた。1階は間貸しし、2階と3階にそれぞれ6畳の客室が3部屋ずつ計6部屋あった。2階建てのほうは1階に土間の炊事場や仏間、家族の部屋があり、2階に客間が4、5部屋あった。あとで改装した。中庭には風呂場もあった。

「昔の人は畳が1畳分あれば我慢してくれたので、けっこう大勢泊まれたんですよ」と話している。(続く)

◇ ◇ ◇

戦前の旅館名簿などをひもとくと、新屋関係の数字は次のとおり。

※「鉄輪温泉使用料徴収人員各月宿屋別表」(大正2、12、昭和3、4、6、7年度)によると、各年度の宿泊者数は1257人、2262人、1771人、1422人、1045人、767人。経営者名はいずれも安波庄八となっている。

※大正12年「豊後温泉地旅館名簿」では、創業年を明治20年10月2日としている。

※昭和12年現在の「別府旅館協会加盟旅館」の名簿では室数12、畳数72。昭和15年現在の「温泉大鑑」では室数11、収容数33人としている。

2010年10月1日(金)

## No1070 鉄輪物語

### 3人はまだ壮年で他界 新屋旅館血脈広げた7人の子供たち



樹木が成長し枝を張り葉を茂らせるように、安波七蔵・フユ夫婦の子供7人は、鉄輪の内外でそれぞれ子をなし、新屋の血脈を広げていった。直系の孫たちによる「いとこ会」が賑やかに開かれていたことが、それを示している。

しかし、命のはかなかった時代、7人のうちまだ壮年期の3人が5年の間に相次いで他界し、フユを嘆かせた。

◇ ◇ ◇

大正13年に亡くなったのが、安楽屋の後藤熊吉に嫁いだ3女アキエ(享年34歳)。まだ2歳の幼子(現在88歳の後藤佐吉元別府市議)も含め3人の子供が残された。姉テルエが“シャンシャン”していたのに対し、アキエはおとなしい人だったという。

◇ ◇ ◇



同15年には東京大学医学部出身で眼科医をした次男勲八が他界(享年38歳)。3人の子供たちは妻ハナの実家富士屋に引き取られたが、ハナも4年後にはこの世を去った。

勲八は鶴田町(北浜1丁目のホテルニューツルタの西側一帯)や北町の現在のホテルアーサーあたりで開業。真宗の熱心な信者で、治療費を払えない人もこころよく診たという。長女池部道子さん(86)＝楠町＝は「医は仁術といって、昔の医者には貧乏でした」。勲八の長男勲さん(故人)は鉄輪で安波医院を開いた。次女妙子さん(84)も医師に嫁いでいる(末広町の渡部内科循環器科クリニック)。

◇ ◇ ◇

さらに昭和3年に亡くなったのが、いでゆ坂沿いにあるかつきやの後藤達吾に嫁いだ次女テルエ(享年 42 歳)。6人も子供がいて、長女が間近に迫っていた女学校の卒業を諦め家事をした。

タバコや塩など商店と旅館・貸間を兼業しているかつきやだが、現店舗を新築したのが同じ昭和3年と伝えられている。以前は坂を下った角にあった駐在所横の小さな一軒家を借り店をしていたため、テルエはよい場所で商売をするのを目標に励んでいたという。3女田原千歳さん(90)＝京町＝は「父も母も実直に働きました」と当時を振り返り涙ぐんでいる。

◇ ◇ ◇

長女ハツエ(初枝)については筑後屋の項ですでに触れたが、取り子・取り嫁で、萬屋から来た原蘇七の妻となり筑後屋を盛り立てた。

4女ミエは日出の士族、笠置家に嫁いだ。

末っ子が5女セツで、南立石本村の旧家出身の古屋益に嫁いだ。産婆をして鉄輪でたくさんの赤ん坊をとりあげた。昭和 12、13 年頃には満寿屋を開いた。平成元年まで長生きをした(享年 92 歳)。

なおフユは享年 77 歳で逝ったが、昭和 14 年頃のことだったらしい。

※勲八の名前の由来は父七蔵が「勲八等をもたらったから」とも言われている。 2010 年 10 月 2 日(土)

## No1071 鉄輪物語

### 入湯客多く商売よかった 衣料品店の安楽屋以前はむし湯そばで好立地



むし湯が新築移転するまで、長い間むし湯のすぐそばという立地条件に恵まれた衣料品店の安楽屋。

大正 12 年「豊後温泉地旅館名簿」では鉄輪・明礬の各旅館に続き、「雑貨商安楽屋」が掲載されている。電話番号は一九番とかなり早く取得しており、経営者名は後藤熊吉。

熊吉(昭和 27 年没、享年 67 歳)は現当主、後藤佐吉さん(88)の父。現在の鉄輪東の出身で、海軍に行ったあと、商売を始めた。非常に商売熱心で、戦前、店の前で染め物の作業に励む姿を見たことがあると語る人は多い。佐吉さんの妻、敦子さん(83)によると、「なっせん(捺染)」といって、器具を使って模様をプリントする作業だった。

◇ ◇ ◇

以前はむし湯が圧倒的な人気を誇っており、敦子さんによると「朝から行列を作っていた」。すぐ西隣りにあったため、「昔は商売がよかった」という。



嫁いできた頃はまだ洋服は扱っておらず、下着やタオル地の寝間着、パジャマなどが中心だった。昭和 40 年に隣接する平野屋旅館が火事で焼けたため、敷地の半分を購入し翌年鉄筋コンクリート造り3階建てを増築した。新しい店で婦人服、子供服、紳士服などを売った。ちなみに元からある木造2階建ては昭和8年の建て替え。(続く) 2010年10月4日(月)

## No1072 鉄輪物語

親子2代とも村議や市議 安楽屋貸間も営業 冬・春は賑わう



後藤熊吉は朝日村の村議会議員もつとめた。本連載第980回(6月9日付け)かつきやの項で、朝日村最後の議会(別府市と昭和10年9月4日に合併する前日)の写真を紹介したが、当日出席した9人の議員の1人として写っている。



息子の佐吉さん(88)も昭和42年から58年まで4期別府市議をつとめたほか、鉄輪の商工会長、貸間組合長、共栄会長などをして地域の世話を焼いた。



朝日村長自宅	二	西	後山吉郎	小川	皇朝自動車株式会社	皇朝自動車株式会社
安楽屋	一	一	安楽屋	安楽屋	安楽屋	安楽屋
二	〇	〇	〇	〇	〇	〇
西	一	一	一	一	一	一
山	一	一	一	一	一	一
吉	一	一	一	一	一	一
郎	一	一	一	一	一	一

安楽屋は35年ほど前まで貸間の営業もした。古い方の店舗2階に客間が9室あり、1部屋に3、4人、多い時は6人ずつ入った。妻敦子さんによると、客は北九州が一番多く、あとは広島など。時期は12月から4月いっぱい、夏はお客はなかった。「なじみの客しか泊りませんでした」とのことで、多い時でも25人程度だったという。



目の前にあったむし湯は新築・移転して、4年前の平成18年8月にリニューアルオープン。跡地はポケットパークに変わった。安楽屋にとっても、大きな環境の変化となった。

正式に店を廃業したのが19年。「主人の病気で、やめよう、やめようと思っていました」と話している。



※掲載した古い看板の写真の「製造元神藤タオル株式会社」は今も存在し、明治40年創業の老舗(大阪府泉佐野市)。

※湯あみ祭りの行列はヤングセンター前。巨大な数珠をつかみながら、太子講の人たちが歩いている。

2010年10月5日(火)

## No1073 鉄輪物語

バイタリティーある実力者 御座旅館もした安波牛太郎長年村会議員や郡会議員も



熱の湯から少し下り鉄輪銀座のほうへ入ると、「誠天閣」という旅館の看板がかかった建物がある。これが、安波牛太郎が経営した「御座(おざ)旅館」の跡。この牛太郎という人物は相当な有力者だったようだ。

大正時代の本に載った略歴(6年「大分県人名辞書」、13年「速見郡郡政史」)によると明治8年生まれ。20代から長く朝日村の村会議員をつとめただけでなく、鉄輪区長、明治40年から4年間は速見郡の郡会議員もしている。朝日村から選出された歴代の郡会議員はほとんどが村長もつとめており、村長にはならなかったものの牛太郎がどれだけの実力者だったか十分に想像できる。

ほかに多くの公職についており、今の農協にあたる農会では村の農会会長、速見郡の農会議員のほか、畜産関係の役員、七島



藺の畳表の生産者組合役員など、ずらりと記載されている。◇ ◇ ◇



さらに学校、駐在所、温泉場の新築、道路改修などに功績があったことも記されている(「大分県人名辞書」)。「速見郡郡政史」のほうでは、「精力絶倫の士」と評し、バイタリティーあふれる人物だったようだ。

◇ ◇ ◇

千寿吉彦が新別府の分譲地へ給湯するための泉源として明治末に海地獄を買い取るより以前、牛太郎が同地獄を所有していたことも語り伝えられている。古老によると、「稲を枯らしサトイモもできないと売った」と地獄を厄介者扱いして売ったという話も興味深い。ともかく、土地はたくさん所有していたようだ。

◇ ◇ ◇ 御座旅館の創業年ははっきりしないが、「鉄輪温泉使用料徴収人員各月宿屋別表」(大正2、12、昭和3、4、6、7年度)に登場するのは昭和3年度から。大正2、12年の頃はまだ存在しなかったようだ。ちなみに昭和3年度からの各年度の宿泊人数は4481人、2205人、3051人、3857人。

昭和12年現在の旅館名簿(別府旅館協会加盟旅館)では室数15、畳数83、電話45。同15年現在(温泉大鑑)では、室数12、収容数33、電話45となっている。

掲載した広告のように、戦後もしばらくはおざ旅館があったようだ。 2010年10月6日(水)

## No1074 鉄輪物語

昭和16年の温泉旅館30軒 職業別明細図の広告に掲載



今回はちょっと変わった趣向で、昭和 16 年頃の鉄輪の旅館の位置がわかる地図(昭和 16 年発行「大日本職業別明細図 別府市」)を紹介したい。

◇ ◇ ◇

現在のいでゆ坂ぞいやむし湯周辺、熱の湯方面、鉄輪銀座にたくさんの宿と一部商店も記されている。

この地図の裏は広告が掲載されており、鉄輪の温泉旅館としては、下記のようにちょうど 30 軒が紹介されている。

「泉屋、錦屋、常盤屋、筑後屋本館、筑後屋新館、御座屋、大平屋、扇屋、温泉閣、温研アパート(九大温研下)、上富士屋、萬屋、陽春荘、瀧本屋、大黒屋、辰巳屋、鶴屋、丸屋、萬力屋、丸美屋、松岡旅館、富士屋、富士屋支店、朝日屋、港屋、白池旅館、新屋、平野屋、瓢箪旅館部、備後屋」

◇ ◇ ◇



※別府市誌によると、昭和 16 年の前年 10 月には第 5 回国勢調査が実施されていて、別府市の人口は 6 万 6 千 7 百 5 6 人、3 千 8 百 1 9 世帯だった。またこの 15 年にはマッチ・砂糖が切符制となっているほか、16 年 4 月から小学校が国民学校となっている。 2010 年 10 月 7 日(木)

## No1075 鉄輪物語

### 旅館・貸間が約 70 軒 戦後 29 年の「別府鉄輪温泉」



前回に続き、戦後の鉄輪の宿を案内する略図を紹介したい。今回は昭和 29 年で、前回(昭和 16 年)とは戦中と戦後という大きな時代変化があるものの、主だった旅館などの変化は少ないように見える。この鉄輪PRの小冊子「別府鉄輪温泉」(昭和 29 年 5 月発行)によると、当時は旅館が 38 軒、貸間が 30 軒余りで、合わせると約 70 軒の宿があったようだ。

◇ ◇ ◇

以下、同冊子の「長期保養と旅館貸間の受入れ」の一文を紹介する。

——長期保養と、滞在は鉄輪温泉の特異性を物語るもので、最もそれに適するのが鉄輪温泉の特徴である。貸間の多いのもその故で、しかも、旅館に於ても、此の長期滞在客に対しては、貸間の便を与えてある程である。

これは都心を離れてあるため、環境的に静かな保養と休養をほしいままにすることが出来るためである。

△旅館三十八、貸間三十有余。收容人員は約千五、六百を受け入れることが出来る。



△宿泊料金—最底三百五十円より最高、千五、六百円までであるが、特別の高級旅館一、二を除く外は、大体、五、六百円から、七、八百円(税込二食付一泊)位ひである。

(金)

## No1076 鉄輪物語

### 今に残る明治の旅館建築 富士屋 32年完成した安波利吉別邸



大地主の富利吉(りきち)。頭に記されて人の最初に書



現在のむし湯から熱の湯方面へ進むと、風格ある明治期の建物が見えてくるのが富士屋ギャラリー―也百(はなやも)＝国登録有形文化財＝。平成8年に営業をやめた富士屋旅館が再生工事を行い、ギャラリーとして生まれ変わった。平成16年4月こけら落としの秋吉敏子ジャズコンサートで再スタートを祝った。

◇ ◇ ◇

士屋・安波家は江戸時代から宿屋業を営んでいたが、明治期に活躍したのは7代目安波利一(りいち)と8代目の利一の名前はたとえば、永福寺再興のために提出された「転宗改寺志願証」(明治17年)という書類で17人の先いたり、鉄輪の温泉案内書「鉄輪蒸窖及両温泉分析並医治効用」(明治21年)で奥付に専売所として地元名士12かれてあり、地元の重鎮であったことがわかる。

◇ ◇ ◇

利一は明治27年に没し(享年60歳)、東京に遊学中だった長男利吉が25歳の若さで、家を継ぐこととなった。

もともと富士屋は今のむし湯の位置にあった。湯治場街の中心部を離れ、広々とした新しい場所にそれまでの鉄輪になかったような豪壮な別荘の建築を企てたのは、若い当主の情熱がさせたことと思われる。

完成した別荘が当時の人々を驚かせたことは想像に難くない。

明治35年10月「大分県案内」では、「旅館数十戸あり富士屋を第一とし萬屋、常磐屋、辰巳屋、中野屋之に次ぐ」と記し、さらに「殊に富士屋別荘は両三年前の新築にかかり宏壮にして輪奐の美を極め加ふるに眺望頗る佳なり」と新築別荘が「宏壮にして輪奐の美を極め」と立派で大きく眺めがすばらしいことも強調している。

なお富士屋の棟札を見ると、棟梁豊嶋弥九郎らの名前や、「明治三十二年二月十七日」と棟上げの日付、「大分県速見郡朝日村安波利吉別邸」と施主の名前が書かれている。建築年は従来明治31年とされているが、正確には翌32年であることもわかる。(続く) 2010年10月12日(火)

## No1077 鉄輪物語



## <P>“むし湯そば”をPR 西南戦争の頃建った富士屋本家



当時は従  
本家(現  
自慢だった。  
湯と“安楽  
なお、続



来の富士屋旅館を「本家」、新たに完成した別荘を「新築」と区別して呼んでいたようだ。  
在のむし湯の位置)は、以前のむし湯のすぐ北側にあり、人気の高いむし湯のそばにあることが  
掲載したPR用の名刺でも、「日本一 蒸風呂ニ接近」と強調しており、さらに本家・新築ともに内  
蒸風呂(ヲンドロ)”があり、「避暑避寒ニ最モ適当ナリ」と宣伝している。  
けて悪質な客引きへの注意を呼びかけているのも面白い。亀川駅から人力車や馬車の便がある  
無理矢理他の旅館に勧誘しているとのうわさもあるので、どうか甘い言葉に惑わされずにおいで

が、途中でいろいろと口実を設け  
下さい、といった内容。



◇ ◇ ◇

さて、同家には掲載したように、古い旅館営業免許が残されている。明治27年の先代利一(3月25日没)亡きあとさっそく、利吉名義に切り替えたものと思われるが、4月10日付けで警察署から「木賃宿免許証」を受けている。言うまでもないが、まだ新築の建物はできていないので、従来の旅館の営業免許ということになる。

掲載したもう1通は、新築の旅館について明治34年1月付けで、「旅人宿営業免許鑑札」下付願いを出した書類の控え。提出先は「速見郡別府警察分署長 警部高橋五郎」。なお、同月21日付けで免許が下されたようだ。

◇ ◇ ◇

時代が下って利吉の次の代のことになるが、この新築のほうを長男の利夫が継ぎ、弟の利三郎が本家を継いでいる。

大正12年「豊後温泉地旅館名簿」には、「本家富士屋」と「富士屋別荘」の2軒が掲載されており、それぞれ経営者名・電話番号・開業年は「安波利三郎、8番、明治27年4月10日」、「安波利夫、2番、明治34年1月21日」とある。この開業年はともに先代利吉が免許を受けた日付であることがわかる。

(続く)

◇ ◇ ◇

※本家の建物は西南戦争(明治10年)の時に建てられたと言われている。立派な建物で、のちの取り壊しの時には、大きくしっかりした梁が見られたという。スタンドグラスもあり、大きなザクロの木もあった。

2010年10月13日(水)



## No1078 鉄輪物語

安道路・温泉整備に尽力 富士屋の安波利吉郵便局長や産業組合長も





波利吉は働き盛りの40歳(数え年)で病没する(明治43年)が、その長くはない生涯のうちに多くの重要な仕事をした。

朝日村発展のため道路と温泉の整備が必要と唱え、明治30年5月に「改築委員長」に選ばれると、道路(延長千六間余=1829m)整備と温泉2カ所の改良を工費1万円を投じて行い、31年2月に竣工させた。馬車が通れるようになって便利になったことは、たとえば35年「新撰豊後温泉誌」にも「近年浴場の改築と共に道路改修車馬通し往復便利なり」と記されている。

村会議員(31年から)、鉄輪区長(34年から)のほかに、39年から鉄輪郵便局長、42年から産業組合(朝日信用購買生産販売組合)の組合長もつとめた。

鉄輪局は12年—17年にもあったが、39年3月に再開された(安部博之さんの資料による)。局は富士屋(元からある本家の建物)に置かれ、利吉が最初の局長になった。

一方、現在の農協にあたる朝日産業組合の発起人にもなり、42年4月に発足すると最初の組合長になった。

◇ ◇ ◇

「朝日村誌」に掲載された利吉の人物伝を元に生涯をたどっているが、最も心血を注いだのが41年にできた「朝日向上会」で、代表をつとめた。

たかは「民風ノ興作ニ産業ノ真殖ニ慈善救済ニ私財ヲ抛チテ今日ニ於ケル本村自治ノ基礎ヲ造リ」とあって、道徳を起しや慈善事業などをしたものと思われる。

日村一班によると、向上会は講師を招いて講演会を開いたり、部落ごとに談話会を行うなどして「徳義の普及」につ

どんなことをし  
広めたり、産業  
大正元年「朝  
とめるなどの活動をしていったようだ。(続く)

◇ ◇ ◇

※掲載した2枚の写真は明治41、42年の同じ時に撮影されたもの。永福寺の本堂と、逆方向の渋の湯の屋根を望んだものがあるが、ともに境内の同じカキの木が画面に入っているのがわかる。

永福寺の屋根の上にさらに構造物を作っている光景は、立て札のように「起工式」だったのか、あるいは落成式だったのか判断しかねるが、本堂は明治41年起工、翌年11月の完成となっている。

渋の湯側を撮った写真は明治42年「別府温泉繁昌記」グラビアに掲載されている。永福寺の写真は同じ時の別写真が掲載されている。  
2010年10月14日(木)

## No1079 鉄輪物語

利吉は晩年仏教に帰依 富士屋妻ノブと5人の子供残す





安波利吉は時勢の動向を洞察し、一度手を下した事業は多少の波乱があっても確実に所期の成果をあげる人物だった。明治 43 年 7 月、数えの 40 歳という早すぎる死は全村を嘆かせたという。

一方で、晩年は明治 41 年の仏教講習会をきっかけにして、深く仏門に帰依した。遺した家訓は「安波家にては、仏法上の四恩を固く守るべきこと。四恩とは父母の恩、国皇の恩、三宝の恩、衆生の恩と」。このうち三宝は、仏教における3つの宝物という意味で、仏、法、僧を指す。同家では僧侶を大切にし、偉い坊さんがしばしば泊まりに来ていたという。



このほか、利吉が書生を4人世話したことも伝えられている。このうち最も出世したのが青田瀧蔵(1890—1971)という人物。国立小樽商科大を出て、のちに東京都品川区に青蘭学院という学校を創設した(現在は青稜中学高校)。



さて、利吉は妻ノブと5人の子供を残してこの世を去った(掲載写真)。男の子が長男利夫と次男利三郎で、すでに紹介したが、利夫が富士屋旅館の新築(現在の富士屋)を継ぎ、利三郎が元からある富士屋旅館の本家(現在のむし湯の位置にあった)を継いだ。女の子は長女がハナ(右から2番目)で、新屋旅館の安波動八(眼科医)に嫁いだ。次女が雪(左端)、三女が露子(右端)。

ノブは佐伯の毛利藩奥家老だった古賀家から嫁ぎ、ふくよかな美人だった。大正9年富士屋に宿泊した俳人高浜虚子が、一目惚れしたというエピソードもある。(続く)



※宿泊者数が分かる「鉄輪温泉使用料徴収人員各月宿屋別表」のうち最も古い大正2年度分には 13 軒が掲載され、利三郎の富士屋本家のほうがトップの1万1463人。利夫の富士屋新築のほうは4位で8522人。ちなみに2位は辰巳屋(8767人)、3位は萬屋(8712人)だった。

※掲載した中庭の絵葉書は、家族がモデルだったようだ。ノブと子供たちが写る写真と比較してみると、手前の男の子が利夫、ずっと後方の男の子が利三郎、左手の2人の娘や縁側の女の子がハナ、雪、露子とそれぞれあてはめることができそうだ。また、左手奥の腕まくりした男性客の左側にいるのがノブと思われる。

2010 年 10 月 15 日 (金)



## No1080 鉄輪物語

### 別大マラソン生みの親 富士屋花とスポーツ愛した安波利夫

利吉の長男利夫(としお)＝昭和 43 年没、享年 62 歳＝は、別大毎日マラソンの生みの親として知られる。

体格がよくスポーツ好きで、東京農大在学中に神宮競技場のインターカレッジ砲丸投げで、優勝するほどの選手だった。

戦後は若い人の育成にはスポーツ精神が必要と大分陸上競技協会設立に参画し、理事長、副会長、顧問を歴任した。

◇ ◇ ◇

別大毎日マラソンは昭和 27 年 1 月 20 日に第 1 回大会(当時は別府マラソン大会)があった。ヘルシンキ五輪代表候補 14 人が別府で強化合宿をしており、合宿中の記録会的な意味合いで開かれた。中津出身で「幻の五輪代表」の池中康雄コーチが利夫に話をもちかけたのがきっかけだった。

20 回大会の前、的ヶ浜公園の“マラソンの森”に長男利一(としかず)さん(76)＝現富士屋当主＝が亡き父に代わり、豊後ツバキを記念植樹したことがニュースになった。当時の毎日新聞(昭和 46 年 2 月 2 日付け)で羽田野和也大分支局長が植樹の話から、利夫について触れ「マラソンの池中康雄さんから、安波さんに話を持ちかけられたのが初めである。(中略)そのころ毎日新聞大分支局長だった野村勇三さんと、大会づくりに走り回っていた姿がきのうのここのように思える。」と創設時を振り返っている。

◇ ◇ ◇

利夫の一周忌追悼文集「グランド爺ちゃん」に池中氏が次のように思い出を寄せている。

「あなたが体育関係に残したもので、中で一番忘れることの出来ないものは、別府毎日マラソンでありましょう。あの生い立ちを思う時、現在のように日



本の三大マラソン否、世界の別府毎日マラソンにまで、発展した、この大会を想像致しましたか。あの生みの苦しみがあればこそ感激も一層と思います。／どうかあの世への土産の一つに忘れずにいて下さい。」(※文集のタイトルは「グランドで時には『大きな雷』を落すが、陽性なためか、若い人より『グランド爺ちゃん』と愛称された」ことによる)

◇ ◇ ◇

農業にも熱心で各地で指導もした。花が好きで、ツバキは 60 種類も育てる凝りようだった。戦後、海地獄そばにできた県温泉熱利用農業研究所(現在は大分県農林水産研究センター花き研究所)誘致にも尽力した。(続く)

◇ ◇ ◇

※掲載写真のうち、フィンランドの選手名を書き込んだものは、別府駅前での撮影と思われるが、詳細は不明。ロサンゼルス五輪(1932年)の陸上競技メダリストの記録には、シッパラ＝ロス五輪槍投げ・銀＝、トイヴォネン＝マラソン・銅＝など写真と同じ名前が登場する。 2010 年 10 月 16 日(土)



## No1081 鉄輪物語

さらなる百年めざし ギャラリーとなった富士屋



利夫の長男が現当主の利一(としかず)さん(76)。

その論考「虚子と祖母ノブ」(1989年「別府史談」第3号所収)では、大正9年高浜虚子が富士屋旅館に宿泊した際に詠んだ「美しき人や蚕飼の玉禪(たまたすき)」の句について、美人だった祖母がモデルになった可能性について記している。

「蚕飼」(こがい)は「カイコを飼う人」、「玉禪」はたすきの美称だが、柴石から鉄輪へ来る途中に見かけた農婦のたすき姿をノブのイメージとダブらせて詠んだものらしい。

利一さんは父が語っていたこととして「(虚子が)祖母との出会いの後、祖母の玉禪姿として詠んだと、やゝ自慢気に話したことを覚えている。」と記している。虚子がノブを描いた絵もあったらしい。

なお、利一さんは「別府史談」第2号にも「安波と安浪」の一文を寄せている。「我々一族は、明治の新戸籍までは安浪、新戸籍以降は安波を称している」と記し、江戸時代までは安浪と表記していたが明治時代になって安波と変わったことを説明している。



100年を経て、さらにこれからの100年の意味を込め、「一也百(はなやもも)」と名づけられた富士屋ギャラリーは再生工事を終えて、平成16年4月にオープンした。



利一さんの次女でギャラリー代表の治子さん(40)によると、旅館廃業後、老朽化した建物を「残すつもりはなかった。壊して自宅を建てる予定だった」。ところが相談をした古民家再生の第一人者降幡廣信さんからアドバイスを受け、家族で話し合い決断するのに2、3年かかったという。

現在のギャラリーの有りようを「感性の交差点」と表現。近い距離で演奏が行われることで、「音楽家と楽器、お客さんとの対話で音が変わる様子を横で見続けてきた」。その対話の意味の大きさに気づかされたと話している。(続く)



※掲載した「鉄輪温泉御案内」と書かれた富士屋旅館のパンフレットは昭和10年代のもので、サツキと旅館の玄関を図案化した洒落た表紙。「弊館は鉄輪温泉場中高燥の地を占め風光絶佳当地第一の老舗でありまして鉄道省、八幡製鉄所健康保険組の指定となって居ります」などと案内している。

2010年10月18日(月)

## No1082 鉄輪物語

文人来遊の歴史誇る 富士屋昭和11年鉄輪描いた日本画も



富士屋が旅館営業をしていた頃のパンフレットには、かつてここで詠まれた詩歌も掲載し、「文人来遊」とキャッチフレーズにも掲げて旅館の誇りにしていた。



人間国宝の人形作家・歌人の鹿児島寿蔵(1898—1982)が、庭のウスギモクセイの古木(県特別保護樹、樹齢200年)を詠んだ「四十餘年見ざりし宿の大木犀けなげに黒く繁りてたてり」、高浜虚子(1874—1959)の「温泉に入るや昼寝覚めたる顔許り」「汗人に一山越えて一温泉あり」。

さらに漢学者綿引東海(1837—1915)の漢詩は、読み下せば「温泉東西につらなり車馬南北に忙し／村の名是れ鉄輪先ず登る芙蓉楼(※富士屋のこと)…」と鉄輪や富士屋を詠み込んでいる。



同家には昭和11年夏に宿泊した日本画家、小早川秋声(1885—1974)が描いたむし湯風景など4枚の絵が大切に保存されており、描かれた湯治風景は記録としても貴重なものとなっている。絵の一部は戦前の鉄輪旅館組合発行パンフの表紙に使われている。



当時の旅館の様子を、幼い頃から富士屋で育った池部道子さん(86)＝掲載写真の中央左側の女の子＝と渡部妙子さん(84)＝同右側＝姉妹は、「客筋がよかった。福岡県の京都郡、嘉穂郡あたりのお客さんが多かった」。頭山満(前回写真掲載)が泊まった時は「接待をさせられたが、恐かった」(道子さん)。両親の安波勳八・ハナ夫婦がともに早く亡くなったため、姉妹は兄の勲さん＝掲載写真の男の子＝と3人で引き取られたが、富士屋の子供として「分け隔て無く育てられた」と今も深く感謝している。なお、掲載写真では妙子さんの隣にノブ、道子さんの一人おいて左隣りに新屋のフユが写っている。



※掲載したのは明治23年の県下の財産家の番付表＝秋吉収さん資料提供＝。大判の表には約3000人の名前があり、最上段には特に大きな活字で横綱、大関、小結、前頭約100人を記している。3代前の安波利一(りいち)＝速見郡、朝日村＝も前頭として登場している。

※現在のむし湯の位置にあった元の富士屋のほうは富士屋本家と名乗っていたことはすでに紹介したが、昭和15年現在の「温泉大鑑」などでは富士屋支店となっていて、この頃から名前を変えたようだ。

---

○次回は朝見3丁目の話題を取り上げます

2010年10月19日(火)